

平成 25（2013）年度

年 報

公益財団法人 山階鳥類研究所

Yamashina Institute for Ornithology

はじめに

年報は、その組織の1年間の活動記録です。山階鳥類研究所（以下、本研究所）は創設以来、昭和52年から55年度までの4年間を除くと、平成21年度までは年報を刊行してきませんでしたが、たとえ年報作成に相当な時間を割くことになるとしても、自らの1年間の活動を一覧できるようにし、さらにこの活動記録を基に将来計画を作成することができるようにしたいと考え、「立派ではないが有効に活用できる」年報を作成することにしました。

本年は、年報再刊行の4年目に当たります。年報作成の要領も覚えてきましたので、これまで取りこぼしていた活動記録が少なくなり、本年は約100頁に及ぶ年報を刊行することができました。また、詳細な業務内容を一覧した年報をお読み頂くにはかなりの時間を要しますので、内容をⅠ. おもなできごと、Ⅱ. トピックス、Ⅲ. 業務内容、Ⅳ. 資料編、Ⅴ. 財産目録等、Ⅵ. ご寄付・賛助等に関する資料の6章に分けました。お時間のない方は、まず「おもなできごと」や「トピックス」をお読みいただいた後に、詳細な業務内容をご覧いただきたく、お願いします。また資料編の章には、本研究所の組織図の他、評議員、役員、所員、特任・客員研究員の名簿が記載されておりますので、併せてご覧いただきたくお願いいたします。

4年目を迎えたとはいえ、まだまだ不備な点が多々あるかと存じますので、改良点などお気づきの箇所がございましたら、どうか忌憚のないご意見を賜わりたくお願い申し上げます。

本研究所が文部科学省や環境省、さらに他の財団等から拝受した研究助成に対する成果発表につきましては、個別の報告書を作成しておりますので、本年報はあくまで本研究所の1年間の活動記録を簡潔に取りまとめたものとして刊行しております。

最後に、本年報の取りまとめにご協力賜りました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年8月

公益財団法人 山階鳥類研究所
所 長 林 良 博

目 次

I	おもなできごと	1
II	トピックス	
II-1.	陸鳥の繁殖モニタリング調査開始	4
II-2.	JPタワーの学術標本展示インターメディアテク好評	5
II-3.	GBIFを介した国際情報発信	5
II-4.	聳島のアホウドリ 産卵したメス 尖閣諸島生まれの可能性	6
II-5.	標本資料の寄贈ありがとうございます	7
II-6.	チャタムアホウドリの育雛作業に参加しました	8
III	事業内容	
III-1.	要約	10
III-2.	各論	11
III-3.	保全研究室の事業活動	22
III-4.	科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業	24
III-5.	研究所員の論文・講演等活動成果	52
III-6.	所蔵資料の利用実績・その他	63
III-7.	新聞・雑誌・メディア記事掲載記録	65
IV	資料編	
IV-1.	組織図	70
IV-2.	人員構成	71
IV-3.	評議員名簿	72
IV-4.	役員名簿	73
IV-5.	特任・客員研究員名簿	74
IV-6.	意見交換会・発言録	76
IV-7.	研究成果発表会・発言録	80
IV-8.	研究調整会議・発言録	85
V	財産目録等	
V-1.	平成25年度決算資料	94
V-2.	財産目録	95
VI	ご寄付・賛助等に関する資料	97

I おもなできごと

- 4月1日 林所長が国立科学博物館の館長に就任
- 4月14日 齋藤研究員がふじしろ野鳥と楽しむ会総会（取手市）で講演
- 4月17～19日 標識調査講習会を実施
- 4月20日 佐藤研究員らがクロアシアホウドリの八丈小島での生息確認
- 5月26日 NHK 総合テレビでダーウィンが来た！「小笠原で初産卵！若きアホウドリ夫婦の挑戦」が放映
- 6月8日 齋藤研究員が北海道バンダー連絡会（札幌）で講演
- 7月4日 尾崎副所長が「環境にやさしいまちづくり」で講演（大仙市）
- 7月5日 鶴見自然誌研究室長が野学校（東京）で講演
- 7月10日 関西地区賛助会員の集い
- 7月13日 我孫子市鳥の博物館・山階鳥研共催「鳥の骨展」を開催（～12月1日）
- 7月18日 キヤノン（株）よりアホウドリ調査用撮影機材一式を寄贈
- 7月18日 大阪コミュニケーションアート専門学校の学生1名が山階鳥研で業界研修（～8月1日）
- 7月22～25日 標本収蔵庫・書庫等害虫類侵入状況調査
- 7月26日 節電対策のための夏季一斉休業
- 8月9日 節電対策のための夏季一斉休業
- 8月13日 自動販売機を使ったヤンバルクイナ生態調査プロジェクトの関係者が来所
- 8月17日 尾崎副所長が「野鳥お勉強会」（札幌）で講演
- 8月28日 国際協力機構（JICA）「人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト」で来日の中国のトキ保護や飼育担当者3名の研修を受け入れ
- 9月6日 国際協力機構（JICA）「生物多様性情報システム」で来日の発展途上国の行政官9名の研修を受け入れ
- 9月13～16日 日本鳥学会 2013 年度大会（所員の口頭発表9件、ポスター発表9件ほか）
- 9月14日 「鴛島のアホウドリ産卵したメス尖閣諸島生まれの可能性」日本鳥学会 2013 年度大会で発表
- 9月25日 出口研究員が三井物産環境基金 2013 年度上半期助成団体交流会（仙台市）で講演
- 9月27日 尾崎副所長がグアム環境天然資源局ミーティングで講演（グアム）
- 9月29日 出口研究員が東海大学サイエンスシェアプログラム「海洋生物を科学する」（東京）で講演
- 10月1日 山階鳥類研究所翻訳の「鳥の絶滅危惧種図鑑」（緑書房）を発行
- 10月18日 岡上席研究員が、翠嵐時報OB会（横浜）で講演
- 10月19日 林所長が「手賀沼流域フォーラム」（我孫子）で講演
- 10月22～25日 全日本バードカービングコンクールで山階鳥類研究所所長賞贈呈（受賞者：竜川禎氏）
- 10月 出口研究員が東京都小笠原支庁委託住民説明会（小笠原村）で講演
- 11月2～3日 ジャパン・バード・フェスティバル（JBF）で「山階鳥研見にレクチャー5」「鳥学講座」を開催
- 11月8日 中部地区賛助会員の集い
- 11月9日 小笠原群島鴛島のアホウドリの産卵を確認
- 11月23日 富田研究員が新潟県愛鳥センター スライド発表会及び講演会（新潟市）で講演
- 11月29日 マックス・プランク鳥類学研究所（ドイツ）から渡り鳥研究者が来所
- 11月 出口研究員が御蔵島村自然ガイド講習（御蔵島村）で講演
- 12月4～6日 尾崎副所長が日米・日露渡り鳥保護協定会議（東京）で講演
- 12月6日 平岡専門員が日本野鳥の会東京研究部月例会（東京）で講演

- 12月15日 岡上席研究員が「海のプロフェッショナル2-楽しい海の世界への扉」出版記念セミナー（東京）で講演
- 1月9日 小笠原群島鴎島のアホウドリ卵が発生していないことを確認
- 1月12日 日本鳩レース協会の2013年度総合表彰式で全国最高帰還率賞を贈呈
- 1月18日 森本支援研究員がLiferbird 鳥のサイエンスカフェ（東京）で講演
- 1月19日 東京駅前の学術文化総合ミュージアム、インターメディアテクで、探検家白瀬矗採集のペンギンを展示（～3月2日）
- 1月25日 齋藤研究員が野鳥の会大阪支部・野鳥の会ひょうご・バードレスキュー協会共催第3回鳥学講座で講演
- 1月25日 尾崎副所長が千葉県野鳥の会創立40周年記念総会（習志野市）で講演
- 1月25日 出口研究員が危急種チャタムアホウドリの育雛作業に参加（ニュージーランド・チャタム島）（～2月7日）
- 1月26日 岡上席研究員が「海の魅力を伝えます！ 海を学び、海で働く女性から女子中高生へ」（東京）で講演
- 2月13～14日 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開」の平成25年度研究成果発表会、研究調整会議（東京大学）
- 2月22日 茂田研究員が波崎愛鳥会30周年記念講演会（神栖市）で講演
- 3月5日 九州地区賛助会員の集い
- 3月8日 尾崎副所長が「希少鳥類の未来を考える」（習志野市）で講演
- 3月9日 齋藤研究員が大阪鳥類研究グループ総会（大阪市）で講演

（注）講演については、ここではおもに一般向けのものを掲載したが、毎月開催して、所員が交代で講演する「テーマトーク（我孫子市鳥の博物館）」については省略した（テーマトークについては、P.12

Ⅲ 事業内容 Ⅲ-2各論の「3. 普及・広報事業」を参照）。また、所員の講演の全体については、P.52

Ⅲ-5 「研究所員の論文・講演等活動成果」を参照。

Ⅱ トピックス

平成25年度にあったできごとから、「陸鳥の繁殖モニタリング調査開始」「JPタワーの学術標本展示 インターメディアテク好評」「GBIFを介した国際情報発信」「鴛島のアホウドリ 産卵したメス 尖閣諸島生まれの可能性」「標本資料の寄贈ありがとうございます」「チャタムアホウドリの育雛作業に参加しました」の6つのトピックを、広報紙「山階鳥研NEWS」の転載の形で紹介します。

●陸鳥の繁殖モニタリング調査開始

2012年は福島県含む全国6カ所

標識調査はカスミ網などを使って、鳥類を捕獲し、個体識別用の足環を装着して放鳥するもので、始まった当初は、渡り経路や寿命の解明が主な目的でした。その後、欧米では1980年代後半から、標準化された標識調査による鳥類の繁殖モニタリング調査が国単位で始まりました。この調査によって、個体数の変動ばかりでなく、一般的なセンサス調査（観察により個体数を数える調査）では得ることが難しい出生率、成鳥の生存率などの指標が得られ、鳥類の個体群動態（数の増減の趨勢）について広域的に把握できるだけでなく、その変動がどのような理由によっているかの考察も可能になります。

特に北アメリカのMAPSプログラム（Monitoring Avian Productivity and Survivorship鳥類の生産性と生存のモニタリング）はチェルノブイリの原発事故をきっかけにして開始され、現在ではアメリカの400カ所以上で実施されています。

日本では従来この種の調査を実施していませんでしたが、福島第一原子力発電所の事故で放出された放射性物質が野生鳥類に短期的ならびに長期的にどのような影響があるのか、モニタリングの体制づくりが急務と考えられました。また原発事故対応を離れても、野生鳥類の保全の基礎データとしてこの調査は有意義なものと考えられます。

調査は、5月下旬から8月中旬に、10日単位の期ごとに1回ずつ、調査時間とカスミ網の枚数を定めて行い、2012年は、北海道1、福島県3（高線量地域1カ所を含む）、新潟県1、鳥取県1の合計6カ所で実施しました。捕獲される鳥類はおもにスズメ目に属する陸棲の小鳥類です。この調査はある程度長期間の調査が必要と考えられ、また調査地点も全国で増やす必要があり、詳細な分析は今後のデータの蓄積を待っておこなうことになります。



ウグイス雌成鳥（上）と雌幼鳥（いずれも2012年8月5日福島県飯館村）。種ごとに捕獲される成鳥と幼鳥の比を記録することで年ごとの繁殖成功の推移を把握できる

（山階鳥研NEWS 2013年5月号）

●東京駅前 JPタワーの学術標本展示

インターメディアテク好評です

本紙3月号でご案内したとおり、東京駅前にできたJPタワーの学術文化施設「インターメディアテク」(IMT)が3月21日に開業し、山階鳥研が寄託した標本約300点が展示されています。多数の来場者が訪れ、たいへん好評をいただいています。

JPタワーは、1931年に建造された旧東京中央郵便局の建物を一部保存再生し、新たに建てた高層ビルをあわせたもので、低層部の一部、旧郵便局の建物2・3階部分にインターメディアテクがあります。

ここには、東京大学総合研究博物館の監修のもと、同大学が開学以来収集してきたおもに自然誌系の学術標本コレクションと、山階鳥研の所蔵鳥類標本約300点が、保存、展示、公開されています。レトロな趣味で統一した展示が、昭和モダニズムを代表するといわれる建築を生かした空間に繰り広げられています。

東京大学総合研究博物館の担当者は、「来館者にはとても好評で、東京駅前で気軽に寄ることができてよいとか、古い理科室に迷い込んだようでわくわくして楽しいという感想をいただいています」と話しています。多数のご来場をお待ちしています。

【名称】JPタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」

【住所】100-7003

東京都千代田区丸の内2-7-2

JPタワー2～3F

(JR・東京メトロ丸の内線東京駅徒歩1分、地下より直結)

【開館時間】

11:00～18:00(木金は20:00まで、入館は閉館時刻の30分前まで)

【定休日】月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日休館)、年末年始、その他館が定める日

【入館料】無料

【問い合わせ先】03-5777-8600(ハローダイヤル)

(山階鳥研NEWS 2013年7月号)

●生物多様性情報共有の枠組み

GBIFを介した国際情報発信

山階鳥研では、文部科学省等から資金を得て、生物多様性情報のインターネットでの共有をはかる国際的プロジェクトの枠組みを経由した情報発信に取り組んでいます。

そのうちのひとつがGBIF(ジービフ)による、収蔵標本データの国際発信です。GBIFは、「地球規模生物多様性情報機構(Global Biodiversity Information Facility)」と呼ばれる国際プロジェクトで、分散型のデータベースネットワークによって、全世界の生物多様性情報を誰もが自由に利用できるようにすることを目指したものです。これは、生物多様性情報が世界的な生物標本コレクションや関連の文献を豊富に保有する先進諸国に偏って存在している状況をインターネットによって解消し、世界の生物多様性に関する現状把握や研究にはずみをつけようとするプロジェクトと言えます。

山階鳥研では、所蔵標本のラベルデータについてGBIFのフォーマット(書式)に合わせた整備を行ってきましたが、2012年度末までに6万件をGBIFに提供することができました。これらのデータは、もともと山階鳥研の標本データベース(<http://decochan.net>)で見ることができたものですが、今回の提供の結果、サイエンスミ

ユージアムネット（S-NET、国立科学博物館が運営する全国の科学系博物館の情報へのポータルサイト、<http://www.science-net.kahaku.go.jp>）で共有されたほか、GBIFポータルサイト（英文、<http://data.gbif.org/welcome.htm>）でも順次閲覧が可能になります。山階鳥研では今後とも、引き続きGBIFの事業に貢献してゆく計画です。

（山階鳥研NEWS 2013年9月号）

●鴛島のアホウドリ

産卵したメス 尖閣諸島生まれの可能性

山階鳥類研究所では、絶滅危惧種アホウドリのいっそう確実な復活のため、伊豆諸島鳥島のアホウドリのヒナを小笠原諸島鴛島に移送し、人工飼育によって巣立たせることで新しい繁殖地を形成する事業に取り組んでいます。この事業によって昨年11月に鴛島で初めて産卵されたアホウドリの卵を今年1月に回収して分析した結果、卵を産んだメスが尖閣諸島で生まれた個体の可能性が高いことが示唆され、9月14日に日本鳥学会2013年度大会で発表しました。

移送初年の2008年に人工飼育により巣立った個体（オス、カラーリング番号Y01）と野生個体（メス）との間に2012年11月14日に産卵があったことや、抱卵されていた卵の発生が進んでいなかったことはすでにご報告しています（本紙本年1月号、3月号）が、今回の結果はその卵を回収して採取したミトコンドリアDNAを北海道大学理学部の泉洋江氏、同大学総合博物館の江田真毅氏と共同で分析した結果わかったものです。

近年の分子遺伝学的研究によって、アホウドリには大きく離れた二つのクレード（単系統群＝共通祖先に由来するグループ）に属する個体がいいて、それぞれクレードAとクレードBとすると、尖閣諸島にはクレードAに属するもののみが生息し、鳥島生まれのヒナはクレードBに属する個体が主だが、クレードAに属する個体も約7%いるという結果が得られています（注）。

回収した卵のミトコンドリアDNAを分析したところ、ふたつのクレードのうちのクレードAに属することが判明しました。ミトコンドリアDNAは母親から子に伝えられることから、人工飼育個体とつがいになって産卵した雌は尖閣諸島で生まれた個体の可能性の高いことが示唆されました。山階鳥研では2008年から12年までの5年間に70羽のヒナを移送し、このうち69羽を巣立たせることに成功しています。アホウドリは、巣立ち後数年は島に戻らず、繁殖を控えた3～4年後ぐらいから生まれた島に戻り始めます。鴛島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、11年からは人工飼育した個体の帰還が認められています。アホウドリには大きく離れた二つのクレードが存在していることがわかったので、今後は、出生地の違いと十分対応しているかについて情報収集を図るとともに、この二つのクレードそれぞれの生物学的特性を把握することが保全上重要です。

この事業は山階鳥研が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金ほかの支援をえて行っています。

（注）鳥島の推定個体数3,200羽のところ、分析数42、尖閣諸島の推定個体数350羽のところ、分析数4という限られた数の資料での結果です。



右がオス親（Y01）、左がメス親。オス親の足もとにあるのが1月に回収して今回分析結果が出た初産卵の卵

（2012年11月14日小笠原群島聳島）

回収した卵の外観を観察する佐藤文男研究員
（2013年1月山階鳥研）



（山階鳥研NEWS 2013年11月号）

●標本資料の寄贈ありがとうございます

近年の4件の寄贈から

近年ご寄贈いただいた、まとまった標本コレクションについてご報告します。これらの資料は、あとから同じものを取ることが不可能な、それぞれの地域と時代に生きていた生物の証拠で、伝統的な形態学などの材料となるばかりでなく、将来新しい技術によって、現代では取り出すことができない情報を得ることができる可能性もあります。貴重な標本コレクションを寄贈してくださった皆様に御礼申し上げます。

●福士氏収集品

明治期にイギリス人探検家・動物学者のT・W・ブラキストンに師事して、多くの鳥類標本を収集した福士成豊氏の遺品の寄贈を、本年6月、遺族から受けました。

遺品は、鳥類剥製標本213点および採集記録、日誌等の資料です。このうち鳥類標本は、主として北海道での採集品で、国立科学博物館に福士家から過去に寄贈された標本コレクションや、北海道大学に所蔵されているブラキストンの標本コレクションと関連すると推測され、明治期におけるこれらの地域の鳥類相を証拠だてる資料として貴重なものです。

●薄田氏収集品・風間氏収集品

また、新潟市在住の薄田豊春さんと、風間サキさんから本年、それぞれ標本コレクションの寄贈を本年8月に受けました。薄田豊春さんからいただいたのは、父親の薄田豊太さん（故人）とご本人が戦前から戦後にかけて狩猟により採集したもの、あるいは死んだ鳥を譲り受けて標本としたものなど約160点で、地域の鳥類相の証拠となると考えられます。薄田さんからは結婚して宮城県在住の豊太さんの娘さんの手元にある標本30点あまりについても寄贈の申し出があり、本年10月に受け入れました。また風間さんからご寄贈いただいたコレクションは、ご主人の風間佐二さん（故人）が生前収集された鳥類などの剥製45点で、本年8月に受け入れました。

●伏原氏収集品

2010年9月には、鳥類研究家の伏原春男さん（故人）の標本コレクション351点が遺族から寄贈されています。伏原さんは、戦前は軍医として中国大陆で従軍しながら鳥類を採集して標本を作成し、戦後は地元京都で標本を採集されました。この中には、分布が中国東北地方を中心に東アジアの狭い地域に限られており、当時から

珍しかったホオジロ科の絶滅危惧種コマホオジロ3点の標本も含まれているなど、貴重なコレクションとなっています。



山階鳥研のロビーに搬入した福士成豊氏の資料を点検する
岩見恭子自然誌研究室研究員

(山階鳥研NEWS 2013年11月号より一部編集)

●ニュージーランド新繁殖地形成に協力

チャタムアホウドリの育雛作業に参加しました

出口研究員らは、1月25日から2月7日までニュージーランドのチャタム島で、国際自然保護連合レッドリストの危急種チャタムアホウドリの人工飼育に参加しました。

ニュージーランド本土から800キロメートル東に位置するチャタム諸島には、チャタムアホウドリ約5,000つがい繁殖しています。面積が狭く傾斜の急なピラミッド島のみで繁殖しており、このままでは個体数の増加は見込めず、また突発的な環境変化に対するリスクを避けられないことから、山階鳥研が確立した移送と人工飼育の技術を使って、同諸島のチャタム島に新たな繁殖地を形成させる取り組みが、市民団体「チャタム諸島タイコトラスト」(Chatham Islands Taiko Trust)によって今冬から行われています(本紙1月号参照)。

同地を訪れたのは出口智広研究員と、小笠原群島鴎島でアホウドリの人工飼育に現地スタッフとして参加してきた南俊夫さんです。鴎島でのアホウドリ人工飼育で得られたデータから適切な給餌量をアドバイスしたほか、給餌にも実際に参加して技術的な協力を行いました。

出口研究員によると、チャタムアホウドリのヒナはアホウドリと異なり、巣の代わりに設置した植木鉢の上から逃げないので、移送された30羽のヒナに給餌するのに、鴎島で15羽給餌するのとほぼ同じ時間で済みました。衛生管理はアホウドリの飼育で確立した手順によって行いましたが、現地は小笠原と異なり風が強く、かつ気温が12～15℃と寒いので、低温の餌によってヒナが体調を崩さないよう、餌はお湯で暖めてから与えました。

その後、チャタムアホウドリは順調に発育し、4月2日には最初のヒナが巣立ちしました。出口研究員らの今回の協力は三井物産環境基金の助成金で実施しました。



チャタムアホウドリのヒナに給餌する出口研究員(右)と南さん。ヒナは巣の代わりに地面に埋め込んだ植木鉢に座っている

(山階鳥研NEWS 2014年5月号)

Ⅲ 事業内容

Ⅲ-1. 要約

公益財団法人 山階鳥類研究所

平成25年度 事業報告
自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日

【公益目的事業】

I. 一般会計による事業 1. 絶滅鳥・エピオルニス総合的研究 2. アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究 3. 普及・広報事業 P R 誌刊行事業 講習会等事業 顕彰事業 4. 山階武彦助成事業 (助成者5名)	責任者 眞鍋眞 佐藤文 平岡男 (事務局)
II. 文部科学省科学研究費補助金(特定奨励費)による事業 山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 総括班 資料の収集と維持管理 分布・個体数データ 形態データ 情報発信	林良博 齋藤武馬 出崎智広 山崎剛史 浅井芝樹
III. 科学研究費補助金(除 特定奨励費) 1. 鳥類標本ラベル情報の不整合を文献資料から解読する研究 2. 日本産鳥類の分類再構築に向けた分子系統学的研究 3. 非学習形質であるフクロウ類の鳴き声の地理的分布は遺伝構造を反映するか？ 4. 生物多様性を規範とする革新的材料技術—バイオメティクス・データベース構築 5. 鳥・航空機及び鳥・鳥無線通信による鳥インフルエンザモニタ網の基礎研究	小林さやか 浅井芝樹 齋藤武馬 山崎剛史 尾崎清明
IV. 二国間交流事業共同研究・セミナー ロシアとの共同研究(R F B R)	齋藤武馬
V. 民間助成金による事業 1. 公益信託サントリー世界愛鳥基金 クロコジロウミツバメの巣箱を用いた営巣地の保全 2. 三井物産環境基金(研究助成) 東日本大震災が鳥類に与えた深刻な被害をモニタリングする体制の確立 3. 三井物産環境基金(活動助成) 小笠原諸島におけるアホウドリ繁殖地の復元と長期的保全に向けた取り組み	佐藤文男 尾崎清明 出口智広
VI. 保全研究室 委託・請負事業 (16件)	尾崎清明
【収益事業】 不動産賃貸事業	(事務局)

Ⅲ-2. 各論

平成 25 年度 事業報告

事業別概要

【公益目的事業】

I. 一般会計による事業

1. 絶滅鳥・エピオルニス of 総合的研究（継続事業）世話人 吉田彰（進化研）

平成 25 年 10 月 21 日、進化生物学研究所に於いて、象鳥の DNA 解析に関する国際共同研究の基本的方針と進め方についての会議が開催された。年末に研究員（外部）がデンマークのコペンハーゲン大学に行き古生物の DNA 抽出法について学んだ。その結果、象鳥の卵殻片を使ったゲノム解析が開始された。山階からは、総裁と林所長が本研究に関与しており、研究経費の一部を一般会計で支援している。

2. アホウドリの人為的コロニー計画に関する研究（継続）責任者 佐藤文男研究員

アホウドリの新コロニー調査を伊豆諸島鳥島において、平成 26（2014）年 2 月から 3 月に行った。新コロニー終日定点観察の結果、アホウドリ雛 98 羽が確認された（鳥島雛総数は 396 羽）ほか、アホウドリの同時着地数がこれまでの最高数の最大同時着地 316 羽（2013 年は 279 羽）を記録した。平成 12 年以降の毎正時における平均着地個体数は 2.4、1.3、1.4、4.2、13.2、18.1、40.9、42.9、51.8、56.3、77.9、104.1、134.9、148.8、149.8 羽と増加しており、雛のいる巣を含め 229 ヶ所（2013 年は 212 ヶ所）で特定のつがい定着が認められ、平成 26 年期の産卵数のさらなる増加が期待された。これらの結果から、アホウドリの鳥島個体群は概ね 3,400 羽となり、順調に増加していることが確認された。

3. 普及・広報事業 責任者 平岡 考（事務局 広報主任）

（1）PR 誌刊行事業

広報紙「山階鳥研 NEWS」を 5、7、9、11、1、3 月に刊行した。11 月は 5,000 部、5、7、9、1、3 月は 4,500 部印刷した。NEWS の内容については、ウェブサイト「刊行物」に目次を掲載している。ウェブサイトについて、平成 25 年度は、随時行った「イベント情報」の更新と結果報告、報道発表、採用や退職、論文の発行等にもなう更新のほか、広く賛助会員やご寄付を募ることができるよう「ご支援のお願い」ページの充実をはかった。また、「山階鳥研 NEWS」から「日本鳥類目録改訂第 7 版」や「GBIF を介した国際情報発信」「データベースシステムの構築と公開」などの記事をピックアップして掲載した。

「山階鳥研 広報ブログ」では、1 年で 60 件の情報発信を行った。

関連した活動として、マスメディアへの報道発表を次の 3 件行った：

- ① 人工飼育個体とつがいになって産卵したメスは尖閣諸島生まれである可能性（2013 年 9 月 12 日）
- ② 新繁殖地形成事業による賀島での人工飼育個体の産卵（2013 年 12 月 13 日環境省同時発表）
- ③ 2013 年 11 月に産卵された賀島のアホウドリの卵は腐敗していることが判明（2014 年 1 月 21 日環境省同時発表）

（2）講習会事業

所内見学会は、講堂で約 1 時間、スライドと口頭説明で山階鳥類研究所について紹介するもので、原則として第 4 金曜日の午前と午後に行っている。平成 25 年度は 7 回行い、合計 45 名の参加者があった。見学者には、個人のほか、千葉県立安房拓心高校、草加市「自然観察レポーター」などの団体があった。

ジャパン・バード・フェスティバルは我孫子市、日本鳥類保護連盟、山階鳥類研究所、市民団体等で構成する実行委員会が我孫子市内を会場に実施するイベントである。平成 25 年度は 11 月 3～4 日に実施した。山階鳥類研究所では、30 分ごと 40 名の総入れ替え制により、講堂で研究員が研究紹介をする「山階鳥研 見にレクチャー」を実施した。2 日間でのべ 639 名の入場者があった。

鳥学講座は、山階鳥類研究所と我孫子市鳥の博物館の共催により、鳥類学の第一線で活躍する研究

者が分かりやすく研究を紹介するもので、平成 25 年度はジャパン・バード・フェスティバルの会期中の 11 月 3 日（土）に、アビスタ（我孫子市生涯学習センター）で東京大学総合研究博物館の松原始特任助教が「ハシブトガラスは高みの見物ー時々歩きますけどね」と題して講演した。190 名の参加者があった。

山階鳥類研究所職員が研究の成果などについて約 30 分のレクチャーでわかりやすく紹介する「テーマトーク」を、毎月 1 回（第 2 土曜日）我孫子市鳥の博物館との共催で、同博物館を会場に実施し、入場者数は 12 回でのべ 355 名だった。

タイトル、日付と演者は次のとおり。

- ・「ヤキトリの鳥類学」（4 月 13 日、平岡考）
- ・「画像でみる山階鳥類研究所の昔とゆかりの人たち」（5 月 11 日、鶴見みや古）
- ・「鳥の行動から放射能被爆を予測する～海鳥オオミズナギドリを例に考える」（6 月 8 日、岡奈理子）
- ・「ズグロカモメはどんな鳥？」（7 月 13 日、尾崎清明）
- ・「鳥類の分類はなぜ変わるのか、どのように変わったか」（8 月 10 日、山崎剛史）
- ・「日本に生息するミソサザイに地理的な違いはあるか？」（9 月 21 日、浅井芝樹）
- ・「DNA から分かるカワラヒワの地理的変異」（10 月 12 日、齋藤武馬）
- ・「標識調査による陸鳥の繁殖モニタリング調査（MAPS）」（11 月 9 日、仲村昇）
- ・「南西諸島の南北で異なるリュウキュウキビタキの特徴」（12 月 14 日、茂田良光）
- ・「海鳥とノネコの仁義なき戦いー伊豆諸島御蔵島の今ー」（1 月 11 日、岡奈理子）
- ・「鳥の死体は語るー解剖してみたて分かることー」（2 月 8 日、岩見恭子）
- ・「採集人折居彪二郎と山階鳥類研究所」（3 月 8 日、平岡考）

山階鳥類研究所では、一般、行政、警察、マスメディア等から電話、電子メール、郵送等で多数の問い合わせを受ける。平成 25 年度は、一旦受けた後に別の部署に回したものも含め、下表のとおり 538 件の問い合わせに対応した。これは所内の別の部署で直接受けた問い合わせ件数を含まない。

平成25年度広報対応質問内訳(分野別・分類群別・質問者別・通信手段別)

	件数	百分率
分野別		
生態	198	37%
識別同定	143	27%
救護・保護・保全	39	7%
形態・構造・体色・器官	39	7%
鳥害	19	4%
標本	10	2%
学名・英名・和名	6	1%
飼育	6	1%
名称・文化・歴史・伝説(伝承)	5	1%
標識	5	1%
分類	5	1%
鳥の生物学一般	4	1%
機能・生理	2	0%
鑑定	2	0%
その他	55	10%
合計	538	100%

対象分類群(科)	カモ	64	12%
	ツバメ	37	7%
	カラス	25	5%
	ヒタキ	25	5%
	ハト	24	4%
	タカ	22	4%
	アホウドリ	19	4%
	キジ	16	3%
	カモメ	14	3%
	サギ	12	2%
	フクロウ	12	2%
	セキレイ	11	2%
	メジロ	10	2%
	クイナ	10	2%
	ヒヨドリ	9	2%
	ホオジロ	9	2%
	キツツキ	9	2%
	シギ	9	2%
	モズ	9	2%
	スズメ	8	1%
	ムクドリ	8	1%
	カワセミ	8	1%
	トキ	7	1%
	ウグイス	6	1%
	シジュウカラ	6	1%
	アトリ	6	1%
	インコ	6	1%
	鳥類全般	5	1%
	ウ	5	1%
	ペンギン	5	1%
	ツル	4	1%
	カッコウ	4	1%
	チドリ	4	1%
	コウノトリ	4	1%
	カイツブリ	4	1%
	チメドリ	3	1%
	フラミンゴ	3	1%
	ハヤブサ	3	1%
	アマツバメ	3	1%
	渡り鳥(全般)	3	1%
	ミズナギドリ	3	1%
	カエデチョウ	2	0%
	ヒバリ	2	0%
	カササギヒタキ	1	0%
	コンドル	1	0%
	ツグミ	0	0%
	水鳥	0	0%
	ダチョウ	0	0%
	地域の鳥	0	0%
	マイコドリ	0	0%
	その他	78	14%
	(計)	538	100%

質問者	個人	319	59%
	報道出版関係(うちNHK 24件4.5%)	170	32%
	一般事業会社、諸団体	26	5%
	官公庁・警察	14	3%
	教育関係(学校、博物館)	9	2%
	合計	538	100%
通信手段	電話	336	62%
	e-mail/FAX	182	34%
	手紙・葉書	17	3%
	来所面談	3	1%
	合計	538	100%

(3) 顕彰事業

山階芳麿賞は、我が国の鳥学研究の発展と鳥類の保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰する目的で設けられた賞で、現在は隔年に贈呈している。平成 25 年度は、今後の山階芳麿賞にかかわる催しについて、公益性の観点から一般の参加者への普及的な性格をいっそう高めるとともに、催しにかかるマンパワーを軽減する方策を検討した。その結果、贈呈式は関係者のみでシンポジウムとは別に開催し、シンポジウムは従来の申込み制を廃して、当日参加が可能な形で開催することに決定した。

さらに、平成 26 年度に贈呈する第 18 回山階芳麿賞の選考委員会を 12 月 11 日に開催し、小西正一氏（カリフォルニア工科大学名誉教授）を受賞者とすることに決定した。

(注) その後、理事会により山階芳麿賞表彰規程が改定されたことを受け、平成 26 年 4 月、改めて選考委員会が開催された結果、小西正一氏及び橘川次郎氏に山階芳麿賞（特別賞）を贈呈することになった。

4. 山階武彦助成事業（事務局）

5 名に対し合計 1,495 千円の助成を行った。昭和 59 年度～平成 25 年度、累計で 126 人に対し総額 45,495 千円の助成を行ったことになる。なお、公益という観点から、平成 24 年度の申請分（平成 25 年度実施分）からは助成対象者を外部の者に限定している。平成 25 年度の助成対象者 5 名の氏名、所属、出席した会議等名称、助成金額、開催地を以下の表にまとめる。

助成対象者	所属機関	会議等名称	助成金額 (千円)	開催地
郡司 芽久 (ケンジ メグ)	東京大学総合研究博物館	国際脊椎形態学会議	297	スペイン（バルセロナ）
杉田 典正 (スギタ リマサ)	独立行政法人国立科学博物館	第 16 回国際コウモリ研究会議	300	コスタリカ（サンホセ）
高橋 満彦 (タカシ ミツヒコ)	富山大学 人間発達学部	第 20 回全米野生動物学会大会	298	アメリカ（ミシガン州）
松葉 史紗子 (マツハラ ミサコ)	東京大学大学院農学生命科学研究科	国際生態学会議 2013	300	イギリス（ロンドン）
本村 健 (モトムラ ケン)	中野市立博物館（中野市教育委員会）	イギリスにおけるチョウゲンボウの営巣環境調査	300	イギリス（ロンドン周辺）

II. 文部科学省科学研究費補助金（特定奨励費）による事業

研究事業名：山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開

－18 世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する－

（採択年度 平成 24～26 年度 3 年間）

目 的：山階鳥類研究所が蓄積してきた莫大な生物多様性情報の維持管理・拡充に努めるとともに、それらをデジタル化してインターネット上にアップロードすることによって世界の研究者との共有化を実現する。これにより、急速に失われつつある生物多様性の保全に貢献することを第一の目標にかかげ

る。また、進化生物学、生物模倣工学など、生物多様性そのものに知的関心を抱く関連学術分野の振興を図ることを第二の目標とする。

具体的には、1) 資料の収集と維持管理に取り組むとともに、それらを活用して2) 分布・個体数データ、および3) 形態データの整備と情報発信を行う。

実施体制：

- 0 班：総括・研究調整会議 責任者 林 良博（研究所長）
- I 班：資料の収集と維持管理 責任者 齋藤武馬（自然誌研究室研究員）
- II 班：分布・個体数データ 責任者 出口智広（保全研究室研究員）
- III 班：形態データ 責任者 山崎剛史（自然誌研究室研究員）
- IV 班：情報発信 責任者 浅井芝樹（自然誌研究室研究員）

25 年度進捗状況：

【0 班：総括・研究調整会議】

(1) 平成 25 年度研究成果発表会の開催。

開催日：平成 26 年 2 月 13 日（木）

開催場所：東京大学農学部フードサイエンス棟

出席者：総括班メンバー、特任研究員、客員研究員、公官庁幹部、理事、評議員、職員等、計 70 名。

(2) 研究調整会議

開催日：上記発表会の翌日 2 月 14 日（金）

開催場所：上記施設内

出席者：総括班メンバー（11 名）、理事長、所長及び所員。

上記（1）、（2）には、総裁も出席された。

【I 班：資料の収集と維持管理】

(1) 野外採集・寄贈受入・購入・交換による資料の収集は、合計 3,004 点（冷凍遺体 438 体、組織サンプル 624 点、標本 469 点、学術雑誌 1,253 冊、単行図書類 215 冊、視聴覚資料 5 点）であった。また、日本産鳥類に関するプリント写真、ネガ、ガラス乾板などの資料（約 470 点）の寄贈を受け入れた。保有する冷凍遺体を材料として 902 体（剥製 444、骨格 458）の標本を作製した。

(2) 資料の閲覧者数は標本資料の利用者がのべ 57 人、図書資料の利用者がのべ 34 人であった。資料の借用・提供の依頼は、国内外から標本資料 3 件、組織サンプル 4 件、文献複写 12 件の計 19 件があった。

(3) DNA バーコーディング事業については、日本産鳥類の塩基配列決定実験を行い、国際データベース BOLD (Barcode of Life Data Systems) に塩基配列データ 1,040 点、標本画像 1,056 点を登録した。これらの成果をまとめた論文を Molecular Ecology Resources 誌に投稿した。

【II 班：分布・個体数データ】

(1) 1990 年から 1999 年までの標識調査情報計約 173 万件について、既存のデータベースに緯度経度情報を付加した。

(2) 標本については、韓国・台湾産の資料 9,280 点の標本ラベルをチェックし、採集地の緯度経度情報を整備した。

(3) これまで作り上げてきた分布・個体数データベースの活用例として、夏鳥として日本に飛来するツバメ、オオヨシキリ、コムクドリの渡り時期や、集団繁殖地を形成するウミネコの個体群動態に関するパラメータの変遷から大規模気候変動が地域生態系に及ぼす影響を解析した。

(4) 標識調査において、捕獲努力量などの調査手法に関する情報をデータベース化するための下準備として、1975 年、1976 年、1977 年、1978 年、1981 年、2010 年の調査日誌を PDF 化し、1975～1978 年の計 3,504 件の調査情報をデジタル化した。

(5) 標識調査情報の安定的かつ効率的な収集を図るために、調査技術およびデータの利用可能性に関する研究集会「標識調査の現状とこれからについて」を日本鳥学会 2013 年度大会において協力調査員とともに実施し、約 70 名が参加した。

【III 班：形態データ】

(1) 形態測定値については、標識調査の記録をもとに、約 2 万 7 千件のデジタルデータを作成した。

(2) X線CTデータ432点、マルチスペクトル画像119点を作成した。

(3) X線CTデータをダウンロードすることができるとともに、データから構築された立体モデルを閲覧できるウェブサイトの試作品をプログラミングした。

(4) 蓄積したX線CTデータを活用することで、我孫子市鳥の博物館と共同で普及啓発用動画コンテンツを開発した。このコンテンツは、同館における展示（「鳥の骨展—空飛ぶ骨組み—」平成25年7月13日～12月1日）、水戸市立博物館における展示（「天空を翔る鳥たち—千波湖畔に生きる—」平成26年2月1日～3月9日）に使用された。

【IV班：情報発信】

(1) X線CTデータを配信するウェブサイトの試験運用を本年2月に行った。

(2) 研究所の所蔵標本について情報発信を行う「山階鳥類研究所標本データベース」(<http://decochan.net>)の運営を行った。平成25年度にこのウェブサイトを訪問した人の数はのべ18万9,500人であった。新たに2,016点の標本についてデータの整備と標本写真の撮影を済ませ、同サイトへのアップロードの準備を整えた（これらのデータのアップロードは本年5月に行われた）。

(3) OPACへは16誌を新規登録し、総数が3,024件となった。アクセス数はのべ246人であった。

(4) 山階鳥類学雑誌の45巻1号・2号を発行し（12報文、187ページ）、J-STAGEにおいて43巻の電子版（PDF）の公開を開始した。J-STAGEから配信されているバックナンバーのPDFファイルは平成25年度中にのべ7,165回閲覧された。

III. 科学研究費補助金（除 特定奨励費）による研究事業

1. 研究課題名：鳥類標本ラベル情報の不整合を文献資料から解読する研究（若手研究B：H24～26） 代表者 小林さやか 専門員

本研究は、日本の動物学の草創期（明治から大正初期）に採集され、学術上重要な標本を多数含んでいる東京帝国大学動物学教室の鳥類標本コレクションを対象に、標本台帳や採集日誌などの文献と照合することで、「いつ、どこで」といった標本の生物学的情報を明確にし、当時の歴史的背景などを解明することを目的としている。

本年度は、このコレクションの全体像を把握するために、北海道大学植物園の加藤 克先生と打ち合わせた。その後、産前産後、育児休暇に入ったため、研究調査は中断した。

2. 研究課題名：日本産鳥類の分類再構築に向けた分子系統学的研究（若手研究B：H24～26） 代表者 浅井芝樹 研究員

対象種としたミソサザイとクロジについてサンプル採集が不十分であったため、平成25年度は宮崎県、福岡県、兵庫県でサンプル採集を行い、ミソサザイについては各地3個体ずつを捕獲することができ、クロジについては兵庫県で1個体を採集できた。ミソサザイについてミトコンドリアDNAの一部塩基配列を解読して分子系統樹を作成した。その結果、三宅島と八丈島のサンプルが単系統を示し、これは亜種モスケミソサザイ（伊豆大島を除く伊豆諸島）を示すと考えられた。一方、それ以外には地理的に単系統となるものはなかった。つまり、ツシマミソサザイ（九州北部）、エゾミソサザイ（北海道）、カンサイミソサザイ（本州西部）、ヒュウガミソサザイ（九州南部）、オガワミソサザイ（大隅諸島）に相当する分岐は見いだされなかった。よってこの5亜種はすべて亜種ミソサザイに含まれる可能性が強くなった。この成果は日本鳥学会2013年度大会において発表された。

3. 研究課題名：非学習形質であるフクロウ類の鳴き声の地理的分布は遺伝構造を反映するか？（基盤研究C：H24～26 代表者 大阪市立大学 高木昌興）

分担者 齋藤武馬 研究員

H24年度の事業開始からの2年間の野外調査において収集された島嶼の各島（トカラ列島：中之島、慶良間諸島：座間味島、阿嘉島、沖縄諸島：伊平屋島、伊是名島、沖縄島、久米島、南大東島、奄美群島（徳之島）、宮古列島：宮古島、八重山列島：西表島、石垣島、波照間島、与那国島）の遺伝サンプルの分析を行った。その結果、ミトコンドリアDNAの解析では、1)ケラマ海裂を境に南系統と北系統に分岐が深い遺伝的分化がある、2)ケラマ海裂の北側に位置する沖縄諸島には、南系統の遺伝的特徴を持った個体が分布することを発見した。

上記の遺伝解析の結果を生態データ（形態形質、音声）と関連させた分析結果を、第 61 回日本生態学会広島大会において「鳥類の分布に与えるケラマギャップの地史的および生態学的時間スケールの意義」というタイトルで、高木・齋藤の連名で口頭発表を行った。その他、福岡県の沖ノ島で繁殖が確認されたリュウキュウコノハズクについて、現在、学術雑誌に投稿すべく準備中である。

4. 研究課題名：生物多様性を規範とする革新的材料技術 ―バイオミメティクス・データベース構築（新学術領域研究：H24～28 代表者 東北大学 下村正嗣）

分担者 山崎剛史 研究員

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（平成 24～28 年度）の分担者として、生物規範工学（バイオミメティクス）の研究に取り組んだ。具体的には、工学研究者向けに生物の適応的特徴に関する情報を発信し、イノベーションの誘発を図るウェブサイトの開発を外部の研究者とともに進めた。鳥類の羽毛の微細構造について、走査電子顕微鏡画像を集めるとともに、鳥類各科の適応的特徴をまとめたテキストファイルを作成、情報科学の専門家に提供した。

5. 研究課題名：鳥・航空機及び鳥・鳥無線通信による鳥インフルエンザモニタ網の基礎研究（基盤研究 A：H24～26 代表者 東海大学 中島 功）

分担者 尾崎清明 上席研究員

本研究は、鳥インフルエンザの感染メカニズムを解明する目的で、東海大学などと共同で実施しており、繁殖期は日本から遠く離れたシベリアに渡るハクチョウ類の移動実態を、鳥に装着した無線通信機で追跡する。そのため、複数の鳥に装着した無線通信機間でデータの通信を行い、それを日本に渡来したときに一括して受信し、複数個体の移動実態を解明する新しい方法であり、従来の衛星追跡発信機からの受信で個々の鳥の位置を特定する方法の欠点を補うことができる。さらに上空を飛行する航空機からのデータの受信を試みることも目指している。本年度は鳥の行動や生理状況をモニタリングするセンサーの開発、パケット無線通信機をハーネスで装着する方法の検討とともに、捕獲や観察、記録に必要な機材の準備を行った。

IV. 二国間交流事業 共同研究（日本学術振興会との委託契約による研究）

研究課題名：大陸周縁地域は種の生産工場か？ ― 極東地域が大陸産鳥類の種分化に与える影響 ―（ロシアとの共同研究（RFBR）：H24～25）代表者 齋藤武馬 研究員

今年度は、2 年間における事業計画の最終年度にあたる。そのため、代表者の齋藤と西海の 2 名がモスクワにある、モスクワ大学（Lomonosov Moscow State University）を 11 月 18 日～27 日（10 日間）の日程で訪問した。訪露の目的は、日露共同のシンポジウム（Russian-Japanese Joint Symposium on Phylogeography and Speciation in Birds）を同大学構内で開催し、2 年間の研究成果を発表し、情報交換を行うためである。同シンポジウムには、ウラジオストック側の研究者 2 名（代表者の A. Kryukov 博士と L. Spiridonova 博士）も参加した。その他、同大学の附属機関である動物学博物館において、研究対象種の標本計測を行なった。さらに、訪露の期間中、助成金が終了しても今後日露で共同研究体制を継続することを両国間で確認した。

V. 民間助成金による研究事業

1. 公益信託サントリー世界愛鳥基金

研究課題名：クロコシジロウミツバメの巣箱を用いた営巣地の保全（最終年）：

佐藤文男 研究員

クロコシジロウミツバメ（環境省：絶滅危惧種 IA 類選定種）を安定的に繁殖させることを目的に 2010、2012、2013 年の 3 年間、岩手県宮古市日出島の繁殖地において金網被覆・巣箱・誘引音声・携帯端末巣箱内カメラを用いて営巣環境の保全を試みた。また、本種の繁殖環境破壊の原因となったオオミズナギドリ（オオミズナギドリ）の生息状況を夜間固定カメラによって調査し、周期的に島に戻っていることを明らかにした。研究の結果、45 個の巣箱は維持管理を適切に行うことによって利用率が上がり、2013 年には 19 個（42.2%）が利用され、クロコシジロウミツバメの繁殖環境を改善する方法として有効であると考えられた。研究成果として日出島におけるクロコシジロウミツバメの保全策を具体的に提案した。

2. 三井物産環境基金（研究助成）

研究課題名：東日本大震災が鳥類に与えた深刻な被害をモニタリングする体制の確立（契約 No. R11-F3-247 平成 23 年 4 月 1 日～平成 26 年 9 月 30 日）

尾崎清明上席研究員

契約期間の延長：

本助成契約期間は当初平成 26 年 3 月 31 日までの 3 年間であったが、次の主な理由で 6 か月の期間延長が認められ、平成 26 年 9 月 30 日までの 3 年 6 ヶ月となった。

①鳥の繁殖期間が 5 月～8 月であるため、契約期間を延長することにより、個体群動態のモニタリング調査を 2 年分から 3 年分へと充実させることができる。

②国立環境研究所で実施している放射線汚染サンプル分析に時間を要しており、契約期間延長により、より多くの分析結果を得ることができる。

研究目的：生息環境の物理的破壊、放射性物質による汚染を受け、日本の生物相は危機に直面している。中でも放射線に対する耐性が低い鳥類については、東日本大震災を契機とした著しい個体数の減少が懸念される。本研究において当研究所は「鳥類が直面しているリスクを正確に評価し、必要な保護施策を迅速に導き出すことのできる体制をわが国に一刻も早く確立する」ことを目指し、鳥類の個体数の変動と汚染実態のモニタリングを実施する。

研究内容：大きく次の 3 点である。

1 鳥類の個体群動態のモニタリング：日本で繁殖する各種鳥類の個体数の変動を調査する。

2 放射性物質等による鳥類の汚染実態のモニタリング：日本全国で鳥類の遺体や卵等を収集し、放射性物質や他の化学物質による汚染の実態を調査する。

3 被災鳥類標本の修復：津波によって壊滅的な被害を受けた陸前高田市立博物館の支援のため、被災した同館所蔵の鳥類標本を修復する。

25 年度成果（4 月～9 月）：

1 鳥類の個体群動態のモニタリング：前年調査を実施した 6 ヶ所において 2 年目の調査を実施した。新規調査地 1 ヶ所で調査を開始した。福島県内の調査地点 3 ヶ所では、前年標識した個体の帰還が確認され、主要な鳥種に関する生存率指標が初めて得られた。調査地ごとに、捕獲効率、出生率指標等を比較した。調査地点の増加は困難であった。

2 放射性物質等による鳥類の汚染実態モニタリング：（陸鳥）全国から集められたツバメの巣 198 巣について γ 線測定を行い、セシウム濃度を測定した。2011 年に引き続いて 2012 年度に繁殖した巣の線量測定も行った。郡山市内のツバメの繁殖状況を調査した。（海鳥）：クロアシアホウドリの卵の分析を実施した。

3 標本レスキュー：山階鳥類研究所および岡山理科大学の 2 ヶ所でそれぞれ修復作業を行った。

25 年度成果（10 月～3 月）：

1 鳥類の個体群動態のモニタリング：各種指標が、2 年間の調査から得られたため、予備的な段階として、海外の調査結果との比較を試みた。また、国内の標識調査員に向けて調査地点増加のための働きかけを行った。

2 放射性物質等による鳥類の汚染実態モニタリング：（陸鳥）ツバメに関して、2013 年に郡山市内で繁殖状況を調査した巣の回収をおこなった。また、丸ごと γ 線測定の終了したツバメの巣について、乳針で粉碎した後、遮蔽板付放射線測定器を用いて β 線強度の測定を行った。オオジュリンに関して、越冬地での尾羽異常率調査を実施した。（海鳥）クロアシアホウドリ、アホウドリあわせて 15 個の放棄卵について前期に γ 線を測定し、検出下限未満であることを明らかにしたが、引き続きストックホルム条約に追加された PFOS と呼ばれる汚染物質並びにその類縁化合物の測定を行った。

3 標本レスキュー：山階鳥類研究所および岡山理科大学の 2 ヶ所で修復を完了したので、陸前高田市への返還完了までの保存に努めている。

3. 三井物産環境基金（活動助成）

活動名：小笠原諸島におけるアホウドリ繁殖地の復元と長期的保全に向けた取り組み（契約 No. K11-G4-1022 平成 24 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日）出口智広 研究員

活動目的：当研究所はアホウドリの雛を巣立ちまで野外飼育することによって、過去に失われた小笠原諸島の集団繁殖地を復元させる計画を進めている。本活動の第 1 の目的は、これまで発展させた技術を学術的に確立し、一般化することである。加えて、本種が地域の大切な財産となりえるよう、小笠原の地元住民に向けた教育・情報発信を積極的に行い、地元住民主体の活動が展開される状況を作ることが、本活動の第 2、第 3 の目的である。

活動内容：第 1 目的の達成のため、賀島でアホウドリの雛を飼育し、その成果を国際学会、学術雑誌で発表する。加えて、チャタム諸島で実施予定の近縁種の保護活動を指導する。第 2 目的達成のため、

アホウドリと海の保全に関するレクチャーを、小笠原島内、定期船、観光客船で実施する。第3目的の達成のため、鴛島でのモニター調査と、長期的に成功している他の保護活動への参加を通じて、保護と持続的利用を共存させる仕組みを検討する。

25年度の成果（4月～9月）：

1. アホウドリ繁殖地の復元・保全とその技術の学術的確立

1-1. 鴛島に設置したデコイ・音声装置を撤去。同島内のプレハブ倉庫内に移動し、電子機器類については制作メーカーに保守点検を依頼した。

1-2. アホウドリ類の繁殖地復元に関するガイドラインをアメリカ、ニュージーランドの共同研究者とともに作成し、平成25年4月フランスで開催されたアホウドリ類・ミズナギドリ類の保全に関する多国間協定の個体群・保全部会に提出した。

1-3. 鴛島で初めて繁殖に至ったアホウドリの卵（未授精）を採取して遺伝学的な分析を行い、その成果を平成25年9月名城大学で開かれた日本鳥学会2013年度大会でポスター発表した。また、平成21年～23年に鴛島で行ったアホウドリの人工飼育に際し、発信機装着にともなう筋肉負荷の影響を定量評価した結果を、保全生物学全般を扱う査読付き英文学術雑誌 Journal of Wildlife Management に投稿した。

2. アホウドリに関する情報発信と持続的利用の検討

2-1. 前年度下半期に作成したアホウドリに関するパンフレットを父島、母島の小笠原村民全戸に配布し、島外の関係者にも送付した。英語版の作成は25年度下半期の完成を目指す。

2-2. 前年度下半期に父島の福祉センターで行った展示を、母島の定期船の船客待合所で4月21日迄行った。

2-3. 平成25年11月我孫子市で開催されるジャパン・バード・フェスティバルについて、参加が決まっている小笠原観光局および母島観光協会への参画の打診および相談を行った。

3. 学校教育を通じたアホウドリの理解促進

3-1. 昨年度に引き続き、小学校6年生を対象とした「総合的な学習の時間」における授業の授業計画を策定した。責任担当は小笠原村立小笠原小学校。

25年度の成果（10月～3月）：

1. アホウドリ繁殖地の復元・保全とその技術の学術的確立

1-1. 平成25年10月、鴛島にアホウドリを誘引するためにキャンプサイトに残置していたデコイ55体と音声措置を同島北西端に設置した。

1-2. 鴛島におけるデコイ・音声装置の設置場所へのアホウドリの飛来状況を把握するために平成25年10月から平成26年3月にかけて断続的に山階鳥研職員1～2名、補助調査員3～5名により、この場所から西に300m離れた観察サイトにおいて、午前7時から午後4時までの9時間、同場所におけるアホウドリ、クロアシアホウドリ、コアホウドリの着陸数、着陸場所、上空の飛来数、標識装着の有無、特筆すべき行動についてフィールドスコープ（60倍）と双眼鏡（10倍）で連続観測し、これらの内容を15分おきに記録した。

1-3. モニタリング調査を実施しない時期におけるアホウドリの飛来状況を把握するため、加えて、アホウドリの保全活動の成果をより多くの人が見ることを可能とするために、平成25年11月、衛星通信によってインターネット上に画像が自動電送される太陽光発電式の無人画像撮影機を鴛島の北西端に設置した。

1-4. 多くの鳥類種の保護活動にとって重要な参考事例となる本活動の成果を、平成26年2月、都内で開かれた第24回日本飼育技術学会において口頭発表した。

1-5. 本活動で得られた知識・経験を他種の保護活動に役立てるため、平成26年1月ニュージーランド・チャタム島を訪れ、現地NGO(Chatham Islands Taiko Trust)が進めるチャタムアホウドリの保護活動を支援した。

2. アホウドリに関する情報発信と持続的利用の検討

2-1. 平成25年11月に我孫子市で開催されたジャパン・バード・フェスティバルに小笠原観光局および母島観光局とともに参加し、展示及び解説を行った。

2-2. 平成26年1月、父島にて若齢児童向け環境教育プログラムを開催した。

2-3. 平成26年1月、父島にて一般島民向けのアホウドリに関する展示を行った。

3. 学校教育を通じたアホウドリの理解促進

3-1. 昨年度の反省を踏まえ授業の構成や内容を一部修正した。また、全体として座学が主となりやすいため、どのようにして児童を飽きさせず興味や好奇心を刺激できるか、各講師が工夫して授業を

行った。平成 26 年 2 月に行った洋上学習では、目的地を父島周辺とすることで学校の課外活動として実施することができた。なお目的地に合わせて、観察のポイントもアホウドリではなくクロアシアホウドリに、そして小笠原の観光資源でもある海の生き物たちとなるため、それらに繋がるように各授業で布石を打つよう心がけた。

VI. 保全研究室 委託・請負事業

平成 25 年度の委託および請負事業は以下の通りである。

	発注者	事業名称	金額 (千円)	委託／請負
1	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 25 年度鳥類標識調査委託業務	33,900	委託
2	東京都小笠原支庁	アホウドリモニタリング調査委託	13,268	委託
3	国立大学法人新潟大学	平成 25 年度環境研究総合推進費（再導入による希少鳥類の保全手法の確立に関する研究）	4,443	委託
4	環境省	平成 25 年度日米アホウドリ人工衛星追跡共同事業	2,800	請負
5	環境省	平成 25 年度シギ・チドリ類追跡業務	2,499	請負
6	環境省	平成 25 年度日中韓ズグロカモメ共同調査業務	5,093	請負
7	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 25 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（海鳥調査）	13,000	請負
8	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 25 年度鳥類標識足環等の購入	4,270	請負
9	環境省 自然環境局 生物多様性センター	平成 25 年度かすみ網の購入及び管理業務	1,490	請負
10	環境省 関東地方環境事務所	平成 25 年度希少野生動植物種（アホウドリ）保護増殖事業	9,135	請負
11	環境省関東地方環境事務所	平成 25 年度国指定鳥島鳥獣保護区更新調査業務	200	請負
12	一般財団法人自然環境研究センター	平成 25 年度東北地方太平洋沿岸地域生態系監視地域調査海鳥調査業務	3,700	請負
13	一般財団法人自然環境研究センター	野鳥の鳥インフルエンザウィルス保有状況調査にかかる野鳥捕獲業務	4,000	請負
14	一般財団法人自然環境研究センター	トキのヒナへの足環装着等業務	150	請負
15	国立大学法人鳥取大学	平成 25 年度鳥類（カモ類）捕獲調査業務	3,990	請負
16	国立大学法人鳥取大学	平成 25 年度鳥類（ミヤマガラス類）捕獲調査業務	3,900	請負
	合計		105,838	

（注）合計金額は四捨五入により 105,838 千円。実額は 105,837,300 円。

【収益事業】

●東京都渋谷区南平台町に所有するマンション（イースタンホームズ南平台）2室を賃貸する事業である。

1. 103号室

専有面積 104.81 平方メートル。平成 25 年 5 月 12 日契約期間満了となり、テナントが退去した。原状回復工事を行い、8 月 25 日新テナントへ鍵を引き渡した。この間 3 ヶ月余り家賃収入がなかった。また、原状回復工事及びその後の換気扇、食洗機等の更新を含め、総額 6,645 千円の支出があった。賃料は月額 325 千円。（旧テナントの最終賃料は 310 千円であった。）

2. 204号室

専有面積 113.27 平方メートル。月額賃料 360,000 円。平成 23 年 11 月より現テナントが入居している。

収益事業の収益はその 50%を公益目的事業に繰り入れる方針だが、25 年度は 103 号室の原状回復工事費用の支出があったため収益がなく、繰入金はない。

以上

Ⅲ-3. 保全研究室の事業活動

H25 年度は以下の内容で業務を受託または請負い、調査・研究を行った。() 内は業務の委託者。

1. 鳥類標識調査・モニタリング

- ・鳥類標識調査委託業務（環境省自然環境局生物多様性センター）
全国各地のボランティアバンダー約 450 名の協力を得て、野鳥を捕獲し個体識別用金属足環を装着、放鳥した。また主要ステーションにおけるモニタリングを実施し、さらに放鳥および回収データはデータベース化した。調査報告書を作成し協力者へ配布した。鳥類標識検討会を実施し事業の評価・改善点の検討を行った。
- ・鳥類標識足環等の購入（環境省自然環境局生物多様性センター）
標識調査に使用する「金属製刻印足環」をサイズ別に必要個数を算出して不足分を追加発注し、入荷確認をした。全国の調査協力員に配布。
- ・かすみ網の購入及び管理業務（環境省自然環境局生物多様性センター）
標識調査に使用する「かすみ網」を規格別に必要枚数を算出して不足分を追加発注し、入荷確認をした。
全国の調査協力員に貸与し、老朽化等により使用不能となった網の返納分については、直接処分場に運び廃棄した。
- ・重要生態系監視地域モニタリング推進事業（海鳥調査）（環境省自然環境局生物多様性センター）
北海道、青森県、岩手県、東京都、福岡県、鹿児島県トカラ列島・奄美大島、沖縄県の島嶼に設置された調査サイトにおいて海鳥の調査を行った。また検討会を実施した。
- ・東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査 海鳥調査業務（一般財団法人自然環境研究センター）
青森県蕪島、岩手県三貫島、宮城県足島の海鳥繁殖地において、海鳥の繁殖状況を東日本大震災の前後で比較し、影響を評価した。
- ・トキのヒナへの足環装着等業務（一般財団法人自然環境研究センター）
野生復帰トキから野外で生まれた雛を標識するため、樹上の巢内雛を捕獲し、標識後巣に戻した。

2. 保全

アホウドリ

- ・日米アホウドリ人工衛星追跡共同事業（環境省）
アメリカ内務省魚類野生生物局と共同で、鳥島および小笠原群島において前年度以前に衛星発信機を付けた、アホウドリのヒナの行動を継続追跡した。
- ・アホウドリモニタリング調査委託（東京都小笠原支庁）
アホウドリ繁殖地の復元を図るため、雛移送が実施された群島において、デコイや音声を使用して積極的なアホウドリの誘引を行った。また現地調査や無人カメラによる飛来状況等のモニタリングを実施した。
- ・希少野生動植物種（アホウドリ）保護増殖事業（環境省関東地方環境事務所）
鳥島における繁殖状況について、繁殖つがい数・雛数・繁殖可能個体数などのモニタリング調査を行った。また殺鼠剤散布後の、オーストンウミツバメの生息状況調査を行った。
- ・国指定鳥島鳥獣保護区更新調査業務（環境省関東地方環境事務所）
国設鳥獣保護区は 20 年ごとに指定の更新が行われるため、根拠となる基礎資料の収集を行い報告書を作成した。

シギ・チドリ類

- ・シギ・チドリ類追跡事業（環境省）
国内に飛来するシギ・チドリ類渡り経路追跡のため、千葉県谷津干潟・沖縄県沖縄市において、シギ・チドリ類を捕獲し、カラーフラッグを付けて放鳥した。また全国から寄せられたカラーフラッグ観察情報および回収情報の解析を行った。

ズグロカモメ

- ・日中韓ズグロカモメ共同調査事業（環境省）

日本・中国・韓国で協力し、韓国国内の繁殖状況調査および捕獲個体に衛星発信機を装着し、行動追跡を行った。

ヤンバルクイナ

- ・環境省研究総合推進費（再導入による希少鳥類の保全手法の確立に関する研究）（国立大学法人新潟大学）

ヤンバルクイナの再導入のため予備的な研究として、減少要因の解析や、捕獲・追跡技術の開発、国外のクイナ類の再導入の実態把握を行った。

3. 鳥インフルエンザ

- ・野鳥の鳥インフルエンザウィルス保有状況緊急調査業務（一般財団法人自然環境研究センター）

千葉県三番瀬、沖縄県比屋根においてシギ・チドリ類を捕獲し、ウィルス抗体検査用サンプルを採取した。また新潟県関屋海岸においてキジバトを含む小鳥類についても同様の採集を行った。

- ・鳥類（カモ類）捕獲調査業務（国立大学法人鳥取大学）

千葉県宮内庁新浜鴨場・谷津干潟、新潟県福島潟、山口県山口市においてカモ類を捕獲し、高病原性鳥インフルエンザ（H5N1 亜型）の抗体調査に供するウィルス検査用サンプルを採集した。

- ・鳥類（ミヤマガラス類）捕獲調査業務（国立大学法人鳥取大学）

山口県山口市において高病原性鳥インフルエンザ（H5N1 亜型）感染実験用のミヤマガラスを捕獲した。

4. 識別

- ・メジロ識別マニュアル作成業務（環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室）

メジロ識別マニュアルの改訂版を印刷した。

5. 講習会

- ・鳥類標識講習会の実施

実技講習を風蓮湖、福島潟、出水の各ステーションで講習生を受け入れて実施した。また講義講習を山階鳥類研究所で実施した。

6. 鳥類アトラス

- ・鳥類アトラス web 版

すでに公開されている鳥類アトラスは標識調査の成果である回収記録を図示したものである。それに次いで放鳥データ公開の一環としての基礎資料（2007-2011）を作成した。

Ⅲ-4. 科学研究費補助金（特定奨励費）の研究事業

（これは文部科学省に提出した報告書の写しである。）

平成25年度科学研究費補助金（特定奨励費）状況報告書

1. 研究事業名等	山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 ― 18世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する ―						
学 術 研 究 諸団体の名称	公益財団法人 山階鳥類研究所						
学術研究諸団体 の 代 表 者 職 名・氏 名	職 名		理事長				
	氏 名	(フリガナ)	シマヅ ヒサナガ				
		(漢字等)	島津 久永				
研究事業期間	平成 24 年度～平成 26 年度 (3 年間)						
交付 (予定) 額 (単位: 千円)	平成24年度		平成25年度		平成26年度		総計
	56,000		56,000		56,000		168,000
平成25年度 実支出額 (単位: 円)		合計	費 目 別 内 訳				
			物品費	旅費	人件費	謝金等	その他
	【計画額】 (交付申請書 に記載の使用 内訳)	56,000,000	6,954,500	2,829,000	15,820,000	14,496,500	15,900,000
	【実支出額】 ()内は利子 で内数	56,002,252 (2,252)	9,720,596	2,714,291	14,915,451	12,245,523	16,406,391
事務担当者 連 絡 先	職 名		事務局長				
	氏 名	(フリガナ)	ホウジョウ マサトシ				
		(漢字等)	北條 政利				
	〒270-1145		(住所) 千葉県我孫子市高野山115				
	電話番号: 04-7182-1101			F a x 番号: 04-7182-1106			
	E-mail: hojo@yamashina.or.jp						

2. 研究事業の目的

本欄には、事業計画書に記載の研究事業の全体構想及びその中での本研究事業の具体的な目的について記述してください。

本研究事業では、山階鳥類研究所が蓄積してきた莫大な生物多様性情報の維持管理・拡充に努めるとともに、それらをデジタル化してインターネット上にアップロードすることによって世界の研究者との共有化を実現する。これにより、(A) 急速に失われつつある生物多様性の保全に貢献することを第一の目標にかかげる。また、進化生物学、生物模倣工学など、(B) 生物多様性そのものに知的関心を抱く関連学術分野の振興を図ることを第二の目標とする。

具体的には、(I) 資料の収集と維持管理に取り組むとともにそれらを活用して(II) 分布・個体数データおよび(III) 形態データの整備と情報発信を行う。

(I) 資料の収集と維持管理

当研究所が80年の歳月をかけて収集した貴重な資料群（標本・冷凍遺体・組織サンプル・抽出済みDNA・図書資料・標識調査データ）について、品質の劣化を避けるため、適切な維持管理に努めるとともに、そのいっそうの拡充を目指す。当研究所の資料群は鳥類に関するものとして国内最大・最良質のものであり、人類にとってかけがえのない資産である。また、後述する分布・個体数データや形態データの源として、本研究計画の基盤をなす。

(II) 分布・個体数データの整備と情報発信

500万件超を保有する鳥類標識調査データから、採集地点の緯度経度、採集年月日等の情報を抽出してデータベース化し、アジア・オセアニア地域における鳥類の分布変遷の過程を明らかにすることを目指す。また、標識調査データには、捕獲した個体の年齢や性別等の情報が付け加えられていることも多いため、これらの付加情報についてもデジタル化を進める。年齢構成の経時的変化が明らかになれば、そこから各種鳥類の個体数増減の過程を推測することも可能になる。

なお、標識調査データには1923年以前のデータ、戦中・戦後の一定期間のデータの欠失が見られる。この点を補完するため、約7万点を数える当研究所の所蔵標本を活用し、追加データを作成する。標本の採集地点、採集年月日のデジタルデータを作成し、標識調査データとともに同一のデータベースに格納する。これにより、アジア・オセアニア地域の鳥類について、18世紀末から現在に至るまでの分布変遷をカバーした巨大データベースが完成する。

構築したデータベースは、保全生物学を中心とする関連諸分野の基礎資料として、インターネット上で広く一般に公開し、全世界の研究者の共同利用に供する。

(III) 形態データの整備と情報発信

(1) 形態測定値データ配信サイトの構築

体重・翼長・尾長等の形態測定値をデータベース化し、全世界の研究者に向けて配信するサイトをインターネット上に構築する。これらの測定値からは、例えば、鳥類の健康状態についての情報を導き出すことが可能である（例えば、翼長・尾長等の長さの測定値に主成分分析を適用して体サイズの指標を導出し、それと体重を比較することで、体脂肪の蓄積状況の指標を得ることができる）。

山階鳥類研究所が全国のボランティアスタッフの協力のもと、長年にわたって実施してきた鳥類標識調査では、捕獲した野鳥の性別や年齢を推定するための基礎資料として、形態測定値の収集が行われてきた。こうしたデータはいまのところ、各ボランティアスタッフの手元に基本的に紙媒体で保管されており、一元的な管理はなされていないが、予備調査の結果、これらの測定値データは、現在、合計60万羽を超す数の野鳥について蓄積していることが判明した。さらにこの数は今後の標識調査の継続にともない、確実に増加していく。この莫大な量のデータを一カ所に集約し、巨大な

データベースを構築することができれば、例えば、鳥類の健康状態の時間的変化や形態の小進化を追うことも可能になる。

本研究事業では、何もしなければほぼ確実にボランティアスタッフの引退とともに散逸してしまうこれらのデータの収集・保存に取り組み、そのデジタル化を推進する。なお、これらのデータについては、分布・個体数データの場合と同様、標本コレクションを用いた補完を実施する。標本資料の中にはラベルに生時の体重等が記載されているものも多いため、これらのデータのデジタル化を進める。

構築したデータベースは、保全生物学や進化生物学等の基礎資料として、インターネット上で広く一般に公開することを目指す。

(2) 鳥類の三次元形態データ配信サイトの構築

上記目的 (B) の達成のため、X線CT、三次元レーザースキャナ等の機材で当研究所の所蔵標本を撮影し、鳥体各部の三次元構造をデジタルデータ化する。データ配信サイトを構築し、三次元形態データ共有化の実現を目指す。

(3) 鳥類の色彩データ配信サイトの構築

上記目的 (B) の達成のため、多様性に富む鳥類の羽色や卵色をマルチスペクトル画像（各ドットに通常のRGBの3値ではなく、紫外線＋可視光線の波長領域の分光反射率データが割り当てられたデジタル画像。工学分野で用いられる。）に記録する。データ配信サイトを構築し、色彩データ共有化の実現を目指す。

3. 研究事業期間を通して行う研究事業の内容

本欄には、研究事業の目的を達成するための具体的な事業内容について、事業計画・方法等（実施体制を含む）を記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目毎に記述してください。）。また採択時の審査結果の所見及びその対応策等についても記述してください。

事業の推進のため、I. 資料の収集と維持管理班、II. 分布・個体数データ班、III. 形態データ班、IV. 情報発信班を組織する。全体の統括のため、総括班を置く。総括班以外の各班が取り組む具体的な研究事業の内容は以下の通りである。

【I. 資料の収集と維持管理】

資料群（標本・冷凍遺体・組織サンプル・抽出済みDNA・図書資料・標識調査データ）に対し、適切な維持管理を実施して品質劣化を防ぐとともに、そのいっそうの拡充を目指す。具体的には、保管施設の清掃・温湿度管理・防虫／防カビ対策の実施、所蔵品の整理整頓と在庫管理データベースのアップデート、閲覧者対応、貸し出し依頼対応を行う。また、各種資料の拡充のため、野外採集・寄贈受入・交換・購入を実施する。収集した冷凍遺体から鳥類標本・組織サンプル・抽出済みDNAを作製する。また、保有する組織サンプル・抽出済みDNAを活用し、国際プロジェクトであるDNAバーコーディング事業（インターネット上にDNAによる種の同定システムを構築しようと試みる国際プロジェクト）に協力、その推進に取り組む。

統括者1名（当研究所研究員）の指揮のもとに当研究所のスタッフ6名を配置する。このうち、2名はそれぞれ図書資料、標識調査データの収集・維持管理を主務とする。残り4名は鳥類標本・冷凍遺体・組織サンプル・抽出済みDNAの収集と維持管理にあたる。作業の補助として、アルバイトスタッフを雇用する。資料の収集と維持管理に関する有識者4名（山階鳥類研究所特任研究員）が統括者を補佐する。

【II. 分布・個体数データ】

当研究所が保有する1924～1943年（約1万6千件）および1961年から現在まで（約500万件）の標識調査データについて、捕獲地点の緯度・経度情報を整備する。さらに、可能なものについては標高・植生・土地利用などの捕獲環境を追加し、これらすべての情報を組み入れたデータベースを作成する。また、当研究所が保有する18世紀末から現在までの鳥類標本約7万点についても、標識調査データと同じ精度で採集地の緯度・経度情報の整備を進め、環境情報を追加した後、上記のデータベースに組み入れる。これらの作業を通じて、分布・個体数の時間的変遷を解析出来るデータベースを構築する。さらに、このデータベースを利用して、アジア・オセアニア地域における各種鳥類の分布・個体数の変遷過程や将来予測の解析を試みるとともに、インターネットを介した情報の公開を進める。

統括者1名（当研究所研究員）の指揮のもと、当研究所のスタッフ8名が標識調査データの整備にあたり、3名が標本データを担当する。作業の補助として、アルバイトスタッフを雇用する。

【III. 形態データ】

当研究所が保有する資料のうち、鳥類標本・冷凍遺体・標識調査データを活用して鳥類の形態的特徴に関する情報を収集・整備する。データベースを構築し、インターネットによる配信を実現する。具体的には、(1) 形態測定値データ配信サイトの構築、(2) 鳥類の三次元形態データ配信サイトの構築、(3) 鳥類の色彩データ配信サイトの構築に取り組む。

(1) 形態測定値データ配信サイトの構築

標本に付されたラベルには捕獲時に実施された形態測定の結果が記されていることが多々ある

が、これは鳥類の過去の形態的特徴を知るうえで貴重なデータ源である。また、標識調査についても、その実施にあたって、種や性別の同定のため、やはり捕獲時の形態測定がさかんに行われており、標識調査事業の従事者（当研究所のスタッフと外部のボランティアスタッフからなる）のもとには約60万羽分のデータが紙媒体で蓄積されている。当研究所は、これまで十分に活用されてこなかったこの膨大な形態データをデジタル化し、研究者をはじめ、鳥類に興味を持つ者すべての共有財産とするべく、データベースの構築に取り組む。

(2) 鳥類の三次元形態データ配信サイトの構築

鳥類の形態進化に関する研究や機能形態学の研究等の支援のため、当研究所が保有する所蔵標本、標本材料として収集している冷凍遺体を活用して三次元形態データベースの構築に取り組む。データの作成には主にX線CTシステムを用いる。

(3) 鳥類の色彩データ配信サイトの構築

鳥類の色彩の進化に関する研究や生物模倣工学の研究等の支援のため、当研究所が保有する所蔵標本を活用し、羽色・卵色データベースの構築に取り組む。データの作成には工学分野で用いられるマルチスペクトル画像撮影装置を利用する。

統括者1名（当研究所研究員）の指揮のもとに当研究所のスタッフ5名を配置する。1名は上記(2)と(3)を担当し、残り4名は(1)の任にあたる。作業の補助として、アルバイトスタッフを雇用する。

なお、採択時の審査結果の所見には、「形態計測やマルチスペクトル画像などの調査については、他の競争的資金における研究課題へ移行することを検討していただくのがよいのではないかとの意見もあった」と記述されている。上記、(1)と(3)の課題については、他の研究資金への速やかな移行を目指すこととする。

【IV. 情報発信】

本研究事業において新たに構築する分布・個体数データベース、形態測定値データベース、三次元形態データベース、色彩データベースの運営と維持管理を担う。研究所には著名な鳥類学者が残した研究資料が保存されているが、これらについてもインターネットを活用した情報の公開を実現する。現在、すでに運用中である「山階鳥類研究所標本データベース」（<http://decochan.net>）、OPACシステムの運営を継続して行う。

研究成果の発表を行う場の一つとして、山階鳥類学雑誌を刊行する。毎年2号（各号約100ページ）を刊行し、バックナンバーについては、独立行政法人科学技術振興機構が提供する「科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）」を用いた電子公開を行う。

統括者1名（当研究所研究員）の指揮のもとに当研究所のスタッフと外部の有識者計17名を配置する。このうち、11名は山階鳥類学雑誌の編集にあたる人員、4名は各種データベースの公開・運営を支援する人員である。残り2名は両方を兼務する。作業の補助として、アルバイトスタッフを雇用する。

4－1．平成25年度の研究事業の実施体制

研究事業の内容 (研究責任者等が担当する研究事業の内容について、研究項目名を記入してください。)	研 究 者 氏 名		所要額 (千円)
	研 究 責 任 者 (職・氏名を記入してください。)	研究者及び補助者 (研究者と補助者に分けて職・氏名を記入してください。)	
0. 総括・研究調整会議	林 良博 (山階鳥類研究所所長)	研究者 星元紀 (放送大学教授) 川那部浩哉 (京都大学名誉教授) 青木清 (上智大学名誉教授) 石居進 (早稲田大学名誉教授) 岩槻邦男 (東京大学名誉教授) 江崎保男 (兵庫県立大学教授・日本鳥学会会長) 遠藤秀紀 (東京大学総合研究博物館教授・山階鳥類研究所特任研究員) 小野勇一 (北九州市顧問・九州大学名誉教授) 進士五十八 (東京農業大学名誉教授) 早川信夫 (NHK解説主幹) 山岸哲 (兵庫県立コウノトリの郷公園長・山階鳥類研究所名誉所長) 和田英太郎 (前海洋開発機構特任上席研究員) 奥野卓司 (関西学院大学大学院教授) 陽捷行 (北里大学名誉教授)	16, 171, 985
I 資料の収集と維持管理	齋藤武馬 (山階鳥類研究所研究員)	研究者 鶴見みや古 (山階鳥類研究所自然誌研究室長) 浅井芝樹 (山階鳥類研究所研究員) 小林さやか (山階鳥類研究所専門員) 岩見恭子 (山階鳥類研究所研究員) 山崎剛史 (山階鳥類研究所研究員) 茂田良光 (山階鳥類研究所研究員) 西海 功 (国立科学博物館研究主幹・山階鳥類研究所特任研究員) 山本義弘 (兵庫医科大学名誉教授・山階鳥類研究所特任研究員) 加藤 克 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教・山階鳥類研究所特任研究員)	21, 335, 474

II 分布・個体数データ	出口智広（山階鳥類研究所研究員）	塚本洋三（有限会社バード・フォト・アーカイブス取締役・山階鳥類研究所特任研究員） 巖城 隆（目黒寄生虫博物館研究員） 研究者 山崎剛史（山階鳥類研究所研究員） 小林さやか（山階鳥類研究所専門員） 岩見恭子（山階鳥類研究所研究員） 吉安京子（山階鳥類研究所専門員） 尾崎清明（山階鳥類研究所副所長） 佐藤文男（山階鳥類研究所研究員） 米田重玄（山階鳥類研究所研究員） 茂田良光（山階鳥類研究所研究員） 仲村 昇（山階鳥類研究所研究員） 富田直樹（山階鳥類研究所研究員） 千田万里子（山階鳥類研究所専門員）	3, 002, 279
III 形態データ	山崎剛史（山階鳥類研究所研究員）	研究者 岩見恭子（山階鳥類研究所研究員） 吉安京子（山階鳥類研究所専門員） 尾崎清明（山階鳥類研究所副所長） 茂田良光（山階鳥類研究所研究員） 佐藤文男（山階鳥類研究所研究員）	12, 246, 789
IV 情報発信	浅井芝樹（山階鳥類研究所研究員）	研究者 林 良博（山階鳥類研究所所長） 今西貞夫（山階鳥類研究所研究生） 遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館教授・山階鳥類研究所特任研究員） 岡 奈理子（山階鳥類研究所上席研究員） 尾崎清明（山階鳥類研究所副所長）	3, 245, 725

		長) 佐藤克文(東京大学大気海洋研究所准教授・山階鳥類研究所特任研究員) 茂田良光(山階鳥類研究所研究員) 鶴見みや古(山階鳥類研究所自然誌研究室長) 出口智広(山階鳥類研究所研究員) 中村浩志(信州大学名誉教授・山階鳥類研究所特任研究員) 西海 功(国立科学博物館研究主幹・山階鳥類研究所特任研究員) 平岡 考(山階鳥類研究所専門員) 真鍋 真(国立科学博物館研究主幹・山階鳥類研究所特任研究員) 山崎剛史(山階鳥類研究所研究員) 吉安京子(山階鳥類研究所専門員) 綿貫 豊(北海道大学水産科学研究院准教授・山階鳥類研究所特任研究員) Andrew Rossite (Waikiki水族館館長)	
--	--	---	--

4-2. 平成25年度の進展状況及び主な成果

本欄には、上段に平成25年度の事業計画を下段に平成25年度に行った研究事業の進展状況及び主な成果について記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目毎に記述してください。）。その際、所見の反映状況、経費の効率化に向けた取組についても記述してください。

【事業計画】

【I. 資料の収集と維持管理】

(1) 資料の収集と整理

当研究所が80年の歳月をかけて収集した貴重な資料群の維持管理とそのいっそうの拡充に努める。これらの資料群は、分布・個体数データや形態データの源として、本研究計画の基盤をなすと同時に、全世界の研究者の共通の資産であり、細心の注意をもって管理する必要がある。前年度の事業内容を継続し、標本は年間に剥製200体、骨格250体を新たに作成する。標本材料の野外採集は、年60羽以上を目指す。海外の博物館等の研究機関と組織サンプル（筋肉片）、抽出済みDNAの交換を行い、国内で入手の難しい資料の充実を図る。図書資料（単行図書、雑誌等）に関しては、購入・交換・寄贈による新規収集に努める。

保有する資料群（標本・冷凍遺体・組織サンプル・抽出済みDNA・図書資料・標識調査データ）については、品質の劣化を防ぐため、適切な管理条件下での保存に努める。標本収蔵庫や書庫は害虫やカビの発生を防ぐため、年間を通して室内の温度を20℃、湿度を50%以下に保つ。日々の清掃と見回りを欠かさずに行うとともに、管理区域内への害虫の侵入状況に関するモニタリングを実施し、必要な場合には薬剤等による駆除を行う。収蔵庫や書庫には毎年相当数の閲覧希望者が訪れるが、調査対象の資料を速やかに出せるよう、大量の所蔵品の整理に努める。

(2) 共同利用体制の構築とデータ整備

前年度に引き続き、資料の共同利用に関する各種規約類の整備と実際の運用を行う。新たに入手した遺体の採集場所・採集年月日のデータ、形態測定値データを整備し、II班、III班に提供する。DNAバーコーディング事業の推進のため、国際データベースBOLD（Barcode of Life Data Systems）に塩基配列データを登録し、公開を目指す。

【進展状況及び主な成果】

(1) 資料の収集と整理

保有する冷凍遺体を材料として902体（剥製444、骨格458）の標本を作製した。なお、その際、組織サンプルの作成をあわせて行った。標本の作成数は**当初計画より大幅に多く**今年度の目標を十分達成した。標本の作製にあたっては、点数だけでなくその**質の充実**にも努めた。具体的には繁殖期に重点的に採集を行い、繁殖個体の標本の拡充を行ったほか、タンチョウ、サドカケス（亜種）、エミュー等の希少鳥類も新たに収集した。

野外採集・寄贈受入・購入・交換による資料の収集は**当初の計画通り**に実施し、合計3,004点（冷凍遺体438体、組織サンプル624点、標本469点、学術雑誌1,253冊、単行図書類215冊、視聴覚資料5点）を新たに入手した。また、日本産鳥類に関するプリント写真、ネガ、ガラス乾板など約470点の寄贈を受けた（正確な点数は現在集計中）。なお、入手した冷凍遺体のうち、野外採集によるものは**計画より少なく**29羽だったが、これは遺体や標本の寄贈受入が想定よりも多かったため、その処理に人員と予算を割いたためである。

資料群の維持管理、整理は**当初の予定通り**、適切に実施した。今年度の資料閲覧者数については標本資料のべ57人、図書資料のべ34人であった。

(2) 共同利用体制の構築とデータ整備

当初の計画通り、資料の共同利用に関する各種規約類の整備に取り組んだ。利用申請は国内外から標本資料3件（すべて展示目的、合計5標本）、組織サンプル4件（すべて研究目的）、文献複写12件（合計45文献）の計19件があり、審査の結果、そのうちの19件について実際に資料の提供を行った。**当初の予定の通り**、新たに入手した冷凍遺体について、採集場所・採集年月日のデータ、形態測定値データを整備し、II班、III班に渡した。また、**計画にある通り**、DNAバーコーディング事業

の推進のため、日本産鳥類を対象に塩基配列決定実験を行い、国際データベースBOLD (Barcode of Life Data Systems) に塩基配列データ1,040点、標本画像1,056点を登録した。これらの成果をMolecular Ecology Resources誌に2014年2月6日付けで投稿した。

【事業計画】

【II. 分布・個体数データ】

(1) 標識データについては、全体の約3分の1に当たる1990年代のデータ約170万件について、標本については海外標本約1万件について、一定精度の緯度・経度情報を与え、データベースとしてまとめていく。

(2) これまで作り上げてきた分布・個体数データベースの活用例として、日本に飛来する鳥類の渡り時期や、集団繁殖地を形成する種の個体群動態に関するパラメータの変遷から大規模気候変動が地域生態系に及ぼす影響を解析する。

(3) 標識調査において、捕獲努力量などの調査手法に関する情報は調査日誌に記録されてきた。しかし、この情報は紙媒体で保管されてきたため、解析に必要なデータの均質化を行う際の大きな障害となっていた。そこで、この情報をデジタル化し、データベース化するための下準備として、調査日誌をPDF化する。

(4) 標識調査情報の安定的かつ効率的な収集を図るために、調査技術およびデータの利用可能性に関する研究集会を協力調査員とともに実施する。

【進展状況及び主な成果】

(1) 1990年から1999年までの標識調査情報計約173万件について、既存のデータベースに緯度経度情報を付加した。

(2) 標本については、韓国・台湾産の資料9,280点の標本ラベルをチェックし、採集地の緯度経度情報を整備した。

(3) これまで作り上げてきた分布・個体数データベースの活用例として、夏鳥として日本に飛来するツバメ、オオヨシキリ、コムクドリの渡り時期や、集団繁殖地を形成するウミネコの個体群動態に関するパラメータの変遷から大規模気候変動が地域生態系に及ぼす影響を解析した。

(4) 標識調査において、捕獲努力量などの調査手法に関する情報をデータベース化するための下準備として、1975年、1976年、1977年、1978年、1981年、2010年の調査日誌をPDF化し、1975～1978年の計3,504件の調査情報をデジタル化した。

(5) 標識調査情報の安定的かつ効率的な収集を図るために、調査技術およびデータの利用可能性に関する研究集会「標識調査の現状とこれからについて」を日本鳥学会2013年度大会において協力調査員とともに実施し、約70名が参加した。

【事業計画】

【III. 形態データ】

(1) 前年度に引き続き、当研究所員が標識調査の際に集めた約15,000件の形態測定値のうち、未終了の1,500件をデジタル化する。標本ラベルからのデータ作成については約14,000点の所蔵標本を処理する。

(2) X線CTシステム、三次元デジタイザ等を用いた三次元形態データの作成を約200点の所蔵標本について進める。また、マルチスペクトル画像撮影装置を用いた色彩データの作成を約200点の所蔵標本について進める。

(3) 三次元形態データベースの構築を進め、試験運用のための試作品を完成させる。

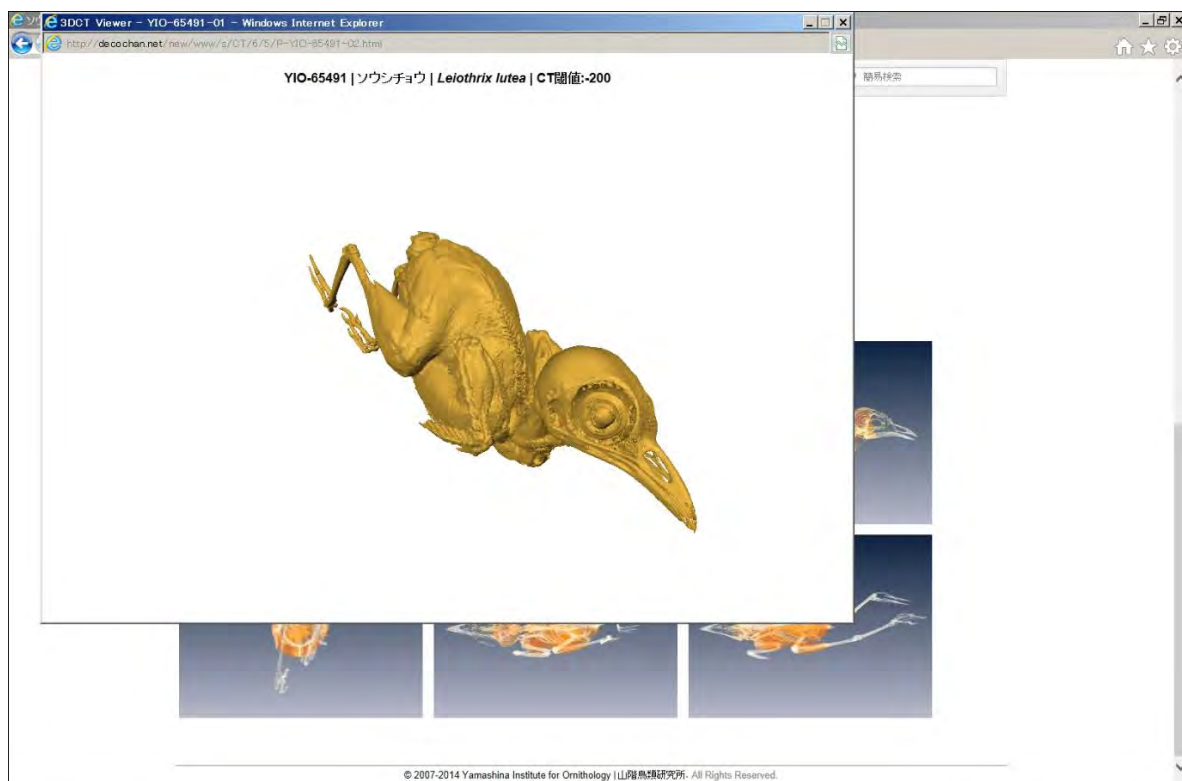
【進展状況及び主な成果】

(1) 形態測定値について情報の整理を進めた結果、当研究所のスタッフが標識調査時に集めたデータの総数は当初見積もりの約15,000件を大幅に上回ることが分かった。新たに発見されたこれらの標識データの処理に注力するよう、計画を改めた結果、平成27年度には目標を大きく上回る約2万7千件のデジタルデータが作成された。

(2) X線CTデータは計画を大幅に上回る432点の資料について得ることができた。一方、マルチスペクトル画像については、機材の故障による撮影の停止期間が生じたため、作成数は当初計画より少ない119点にとどまった。

(3) X線CTデータをダウンロードすることができるとともに、データから構築された立体モデルを閲覧できるウェブサイトの試作品をプログラミングした（下図参照）。マウス操作により、立体モデルの移動・回転・拡大・縮小が可能である。

(4) 蓄積したX線CTデータを活用することで、我孫子市鳥の博物館と共同で普及啓発用動画コンテンツを開発した。このコンテンツは、同館における展示（「鳥の骨展—空飛ぶ骨組み—」平成25年7月13日～12月1日）、水戸市立博物館における展示（「天空を翔る鳥たち—千波湖畔に生きる—」平成26年2月1日～3月9日）に使用された。



【事業計画】

【IV. 情報発信】

三次元形態データベースの試験運用を行う。前年度から引き続き「山階鳥類研究所標本データベース」の運営を行う。データベースに未登録の標本について、データ整備と写真撮影を進め、順次、登録・配信を行う。蔵書については、単行図書および雑誌のデータを順次OPACに登録する。山階鳥類学雑誌45巻1号・2号を刊行する。

【進展状況及び主な成果】

三次元形態データベースについては、2014年2月に上述の試作品の試験運用をインターネット上で行い、ユーザーからのフィードバックを得ることができた。

「山階鳥類研究所標本データベース」は、当初の計画通り、一年間サービスを停止することなく、運営することができた。また、このサイトについては古くなっていたユーザーインターフェイスの一新もあわせて実施した（下図参照）。なお、平成25年度にはこのデータベースへの未登録標本のうち、2,016点について、データ整備と写真撮影を終え、アップロードの準備を整えた（実際のアップロードは本年5月20日に行われた）。

OPACへは、新たに16誌を登録した。

山階鳥類学雑誌は当初の予定通り、45巻1号・2号が発行された（12報文、187ページ）。また、J-STAGEにおいて43巻の電子版（PDF）の公開を開始した。

山階鳥類研究所 標本データベース

ようこそ山階鳥類研究所標本データベースへ
代表的な所蔵標本の画像アルバムを表示します

標本の点数: 62,560点 (2014年3月26日現在)
標本の科数: 147科 (世界の鳥類全科158科)
標本の属数: 1,365属 (世界の鳥類全属2,003属)
標本の種数: 4,249種 (世界の鳥類全種9,023種)

....更新情報....

2014.05.20: 骨格標本等1471点を追加しました。
2014.03.26: デザインをリニューアルしました。
2014.03.26: 新たに545点の標本を追加しました。
2011.10.16: 骨格の標本122点を追加しました。
2011.02.05: 卵・巣の標本178点を追加しました。
2011.01.12: 英語版を公開しました。

分類群の検索	部分一致	完全一致		
ガチョウ目 STRUTHIONIFORMES 64% (711種) 15	シモダカウ目 TINAMIFORMES 22% (104種) 17	エミナドリ目 PROCELLARIIFORMES 47% (47191種) 1053	ペンギン目 SPHENISCIFORMES 71% (1217種) 42	アヒ目 GAVIFORMES 100% (55種) 101
カイツブリ目 PODIPODEIFORMES 45% (920種) 215	ペリカン目 PELECANIFORMES 61% (3354種) 427	コウノトリ目 CICONIIFORMES 60% (74199種) 1442	アゲハ目 PHALCONIFORMES 100% (55種) 21	タカ目 FALCONIFORMES 51% (144284種) 1624
カモ目 ANSERIFORMES 60% (123153種) 2022	キジ目 GALLIFORMES 60% (160268種) 2687	ツル目 GRUIFORMES 39% (78139種) 1156	チドリ目 CHARADRIIFORMES 67% (221031種) 6479	ハト目 COLUMBIFORMES 47% (151021種) 1940
オウム目 PSITTACIFORMES 48% (163343種) 817	シロイロ目 OPISTHOCOMIFORMES 100% (11種) 1	カッコウ目 CUCULIFORMES 55% (82149種) 608	フクロ目 STRIGIFORMES 34% (50147種) 944	ネコバ目 CAPRIMULGIFORMES 30% (31102種) 152
アマツバ目 APODIFORMES 45% (193428種) 739	コウノトリ目 COLIIFORMES 67% (45種) 10	キタバタ目 TROGONIFORMES 70% (2637種) 88	フラウツ目 CORACIIFORMES 60% (121202種) 1398	キツネ目 PICIFORMES 53% (261301種) 2132
スズメ目 PASSERIFORMES 46% (24335303種) 35322	家禽や原種 Poultry 100% (403種) 403			

© 2007-2014 Yamashina Institute for Ornithology (山階鳥類研究所. All Rights Reserved)

山階鳥類研究所

5－1．経費の使用状況（単位：円）

研究事業の内容 (研究責任者等が担当する研究事業の内容について、研究項目名を記入してください。)	合 計	費 目 別 内 訳				
		物品費	旅 費	人件費	謝金等	その他
0 総括及び研究調整会議	16,171,985	0	1,043,252	14,915,451	0	213,282
I 資料の収集と維持管理班	21,335,474	7,323,540	1,080,499	0	6,705,000	6,226,435
II 分布個体数データ班	3,002,279	704,606	351,800	0	1,716,000	229,873
III 形態データ班	12,246,789	1,442,760	238,740	0	3,544,523	7,020,766
IV 情報発信班	3,245,725	249,690	0	0	280,000	2,716,035
合 計	56,002,252	9,720,596	2,714,291	14,915,451	12,245,523	16,406,391

5－2. 研究項目毎の明細（単位：円）			
「5－1. 経費の使用状況」に即し研究項目毎に記入してください。			
研究項目名		0 総括及び研究調整会議	
物品費	品 名	数 量	金 額
	計		0
旅費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	成果発表会・研究調整会議		659,066
	意見交換会		379,366
	その他交通費		4,820
	計		1,043,252
人件費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	給料		14,311,053
	社会保険事業主負担分		604,398
	計		14,915,451
謝金等	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	計		0
その他	品 名	数 量	金 額
	研究調整会議・会議費		91,497
	振込手数料		67,735
	意見交換会・会議費		54,050
	計		213,282

研究項目名		I 資料の収集と維持管理班	
物品費	品 名	数 量	金 額
	PCR装置		577,500
	バ イオリーザー		543,900
	単行本等	75冊	482,086
	パ ソコン	2台	415,655
	雑誌購読料	42誌	2,759,882
	実験用消耗品等		704,209
	実験試薬		576,124
	資料保存用品等		498,978
	文具等		360,786
	ソフトウェア等		191,534
	コンピ ューター消耗品		88,622
	ガソリン代等		41,519
	ポスター修復代		49,245
	除湿機	1台	33,500
	計		7,323,540
旅費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	調査・標本引取り等		837,559
	学会参加		242,940
	計		1,080,499
人件費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	計		0
謝金等	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	臨時職員謝金		6,501,000
	臨時職員有給休暇		204,000
	計		6,705,000

	品 名	数 量	金 額
その他	蔵書データの修正		1,638,000
	標本作製代等		1,447,110
	図書整備業務委託		1,205,400
	デジタルライブラリー保守契約		1,050,000
	標本材料送料等		395,210
	製本代等		213,900
	収蔵庫内生物被害環境調査		192,570
	英文校閲料		42,788
	フリーザー修理代		24,150
	出張お菓子代等		17,307
	計		6,226,435

研究項目名		II 分布個体数データ班	
物品費	品 名	数 量	金 額
	パソコン	2台	327,249
	ソフトウェア等		169,549
	コンピューター消耗品		106,952
	文具等		71,389
	書籍	4冊	29,467
	計		704,606
旅費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	学会参加		294,880
	調査交通費		56,920
	計		351,800
人件費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	計		0
謝金等	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	臨時職員謝金		1,650,000
	臨時職員有給休暇		66,000
	計		1,716,000
その他	品 名	数 量	金 額
	業務委託費		223,150
	通信運搬費		5,740
	文献複写費		983
	計		229,873

研究項目名		III 形態データ班	
物 品 費	品 名	数 量	金 額
	パソコン	5台	504,996
	単色光照射装置	3台	399,525
	実験消耗品等		238,696
	ソフトウェア等		71,320
	書籍	10冊	50,832
	コンピュータ消耗品		47,950
	b-mobile利用料		46,500
	デジタルカメラ		45,569
	照度計	1台	24,446
	文具等		12,926
	計		1,442,760
旅 費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	研究打合せ		165,580
	学会参加		60,060
	勉強会		10,640
	特定奨励費ヒヤリング参加		2,460
人 件 費	計		238,740
	事項（積算内訳）	数 量	金 額
謝 金 等	計		0
	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	臨時職員謝金		2,794,500
	実験助手の派遣		505,023
	臨時職員有給休暇		245,000
謝 金 等	計		3,544,523

その他	品 名	数 量	金 額
	X線CT装置のリース料		3,219,300
	CTデータベースのプロトタイプ作成		984,000
	標本ハル情報読み取り・校正		976,730
	標本検索システムの管理・更新		816,000
	GISデータの整備		600,600
	Windowsレンタルサーバー利用料		238,644
	標本のCT撮影操作業務		141,250
	クラウドサービス料		25,200
	大型計算機システム利用負担金		12,600
	英文校閲		6,142
	貸出標本の輸送保険料		300
	計		7,020,766

研究項目名		IV 情報発信班	
物品費	品 名	数 量	金 額
	プリンター	1台	233,430
	ソフトウェア等		14,880
	文具等		1,380
	計		249,690
旅費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	計		0
人件費	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	計		0
謝金等	事項（積算内訳）	数 量	金 額
	編集補助謝金		135,000
	臨時職員有給休暇		121,000
	英文校閲料		24,000
	計		280,000
その他	品 名	数 量	金 額
	山階鳥類学雑誌印刷費		2,431,380
	山階鳥類学雑誌送料		155,630
	OPACサーバー利用料		100,800
	通信運搬費		28,225
	計		2,716,035

6. 研究事業の成果の公表状況

本欄には、当該事業の成果の公表状況や当該研究分野への貢献度等について記述してください。なお、研究項目を設定している場合は、研究項目毎に記述してください。

【I. 資料の収集と維持管理】

当研究所が保存・蓄積した資料を用いた研究成果について、以下に公表状況を列挙する。

学会発表：

- (1) 新たに発見された富士成豊の鳥類標本、ブラキストン標本との関係。(岩見・鶴見)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (2) 日本産と朝鮮半島産のトキのウモウダニ相。(黒木・長堀・鶴見)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (3) 山階鳥類研究所に所蔵される鳥類標本とコレクター達。(小林・鶴見・山崎・加藤)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (4) ミソサザイ日本産亜種の系統関係について。(浅井・茂田・齋藤・岩見)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (5) カワラヒワ *Chloris sinica* の分子系統解析。(齋藤ほか3名)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (6) 環境変化が生物多様性に与える正の効果の可能性。(山崎ほか4名)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (7) トキ *Nipponina nippon* の羽衣表面の微細構造・化粧色に関する機能の検討。(森本・岩見・山崎)，日本鳥学会 2013 年度大会。
- (8) 日本の野生鳥類の寄生蠕虫相調査の現状について。(巖城・岩見・小林・鶴見)，第73回日本寄生虫学会東日本支部大会。
- (9) 山階芳麿著「日本の鳥類と其の生態」に使用された ^{こぐちもくはん} 木口木版 および関連する資料群の整理保存と解析。(鶴見・園部・山道)，日本鳥学会 2013 年度大会。

論文発表：

- (1) 小林・高橋・菊池・岩見 (2013) 神奈川県横浜市で保護されたアカアシミツユビカモメ *Rissa brevirostris* の記録。日本鳥学会 62(1)。
- (2) 浅井・齋藤・岩見・山崎 (2014) 山階鳥類研究所の寄贈標本 -薄田豊太・豊春氏所蔵標本および佐藤保洋氏所蔵標本-。山階鳥類学雑誌 45(2)，102-119。
- (3) 岩見・鶴見・浅井・齋藤・山崎 (2014) 山階鳥類研究所の寄贈標本 -富士成豊所蔵鳥類標本-。山階鳥類学雑誌 45(2)，120-135。
- (4) 鶴見・園部・山道・塚本 (2014) 山階芳麿著「日本の鳥類と其の生態」に関する原稿，版画等関連資料群の整理保存。山階鳥類学雑誌 45(2)，136-182。

【II. 分布・個体数データ】

- (1) 日本鳥学会 2013 年度大会において「日本に飛来する夏鳥の渡り時期と繁殖時期の長期変化」(公開シンポジウム)、「ウミネコの個体群動態に影響する繁殖期と越冬期の環境要因」(ポスター)の発表を行った。
- (2) 上記の「日本に飛来する夏鳥の渡り時期と繁殖時期の長期変化」は、日本鳥学会誌への掲載用にプロシーディングを執筆した。

【III. 形態データ】

本研究項目で作成を進めているデータベースはまだ完成していないが、平成25年度にはこれまでに蓄積したX線CTデータを活用することで、我孫子市鳥の博物館と共同で普及啓発用動画コンテンツを開発した。このコンテンツは、同館における展示（「鳥の骨展—空飛ぶ骨組み—」平成25年7月13日～12月1日）、水戸市立博物館における展示（「天空を翔る鳥たち—千波湖畔に生きる—」平成26年2月1日～3月9日）に使用された。

【IV. 情報発信】

(1) 「山階鳥類研究所標本データベース」(<http://decochan.net>)では、研究所の所蔵標本のうち、約6万点について、標本写真・ラベル写真・採集場所・採集年月日等の情報のデジタル配信が行われている。平成25年度にこのウェブサイトを訪れた人の数は約18万9,500人であった。

(2) 山階鳥類研究所蔵書検索(OPAC)の登録書誌数は3,024件(平成26年1月28日時点)である。アクセス数は約246人であった(平成25年12月31日現在)。

(3) 山階鳥類学雑誌については平成25年度に12報文を掲載した第45巻を発行した。この雑誌のバックナンバーは、科学技術振興機構が提供するJ-STAGEを通じて、現在、第1巻から第43巻までのPDFファイルが公開されている。平成25年度中にはこれらのPDFファイルが約7,165回閲覧された。

7. 研究事業を推進する上での問題点と対応策及び今後の研究事業の推進方策

本欄には、事業を推進する上での問題点と対応策、次年度以降の計画の変更や研究事業をさらに発展させるための方策等について記述してください。

【I. 資料の収集と維持管理】

当研究所が所蔵する資料群の収集状況には、年代や地域に大きな偏りが見られる。資料の大半は戦前の旧日本領で得られたものである。この状況を改善するため、当研究所では近年、(1)国内産の鳥種の野外採集に力を入れてきたが、今後はそれに加え、(2)海外産資料の収蔵数の増強にも取り組んでいく必要がある。本年8月には、日本において国際鳥学会議が開催されるので、当研究所ではそれにあわせて海外の研究者を対象にした施設見学会を開催する計画を立てている。彼らとのコネクションの構築に努め、交換・購入等によって海外産資料のいっそうの拡充につなげていきたいと考えている。

【II. 分布・個体数データ】

本事業で緯度・経度情報を付加しているデータベースは、今から25年前に作成されたものを基盤として構築されているため、設定の変更、利用可能なコンピューター、入力プログラムとの適合性、標本データベースとのリンクなど、様々な点で問題を抱えている。抜本的なアップデートを行うには、データベースと標識調査の両方に習熟した人材が必要である。本研究所では、本年9月より新たなスタッフを雇用し、この任に当たらせる予定である。

【III. 形態データ】

現在、構築を進めている形態測定値・X線CT・マルチスペクトル画像データベースは、いずれも鳥類の分類体系に基づいて情報を整備したサイトになる予定である。しかし、これでは鳥類の分類について基礎知識を持つユーザー以外には使いにくいものになってしまうおそれがある。この問題を緩和するため、情報工学のテクニックを活用し、鳥類の適応的特徴からデータの探索ができる機能をデータベースに付与することを現在検討中である(例えば、「構造色」というキーワードでハチドリ類やフウチョウ類が検索される等)。この件については、情報工学の専門家(北陸先端科学技術大学院大学溝口教授ら)の支援を受ける予定である。

【IV. 情報発信】

公開している情報をより多くのユーザーに利用してもらうためには、広報活動への注力が必要である。データベースについては、有識者の指導を仰ぎ、プレスリリース等をより積極的に行い、ユーザー数の増加につなげる。山階鳥類学雑誌のサーキュレーション向上については、国内外の学会誌・機関誌の動向のリサーチを強化するとともに、本年8月に日本で開催される国際鳥学会議にて、同誌を宣伝する。

8. 当該学術団体が受け入れた研究資金等（平成26年3月末時点） 本欄には、平成25年度において、貴団体に所属する研究者が研究代表者として応募し、採択となった科研費の研究課題について、研究種目、研究代表者名、研究課題名及び金額を記入してください。平成26年度以降については、継続の研究課題で採択予定となっているもの及び応募中のものについて記入してください。その際、年度ごとに点線で区切り、各年度の最下段には件数と金額の合計を記入してください。 なお、平成26年度以降については、採択予定と応募中それぞれについて、件数と金額の合計を記入してください。 また、「②他の研究資金の採択状況」には、科研費以外の研究費について記入してください。				
①科研費採択状況（特定奨励費以外）				
年度	研究種目	研究課題名 (研究代表者名)	金額 (単位：千円)	特定奨励費で行う事業との相違点
25	若手（B）継続	鳥類標本ラベル情報の不整合を文献資料から解読する研究（小林さやか）	600（直） 180（間）	歴史学の手法を用いることで標本ラベル情報のエラーを修正する手法の確立を目指している。標本管理技術のさらなる向上を期す研究であり、その成果は標本管理の実務を担う特定奨励費事業にとっても有益だが、両者はその目的と内容が明確に異なる。
	若手（B）継続	日本産鳥類の分類再構築に向けた分子系統学的研究（浅井芝樹）	1,100（直） 330（間）	分子系統学の手法を用いて日本産鳥類の分類体系の見直しに取り組むものである。特定奨励費事業で収集された組織サンプル等の活用を伴うが、資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す同事業とは目的・内容が明確に異なる。
	合計2件		1,700（直） 510（間）	
26	若手（B）継続	鳥類標本ラベル情報の不整合を文献資料から解読する研究（小林さやか）	600（直） 180（間）	同上
	若手（B）継続	日本産鳥類の分類再構築に向けた分子系統学的研究（浅井芝樹）	1,000（直） 300（間）	同上
	合計2件		1,600（直） 480（間）	
	応募中0件			

②他の研究資金の採択状況（府省、地方公共団体、研究助成法人、民間企業等からの研究費）					
年度	所管省庁等名	制度、助成金等名	研究課題等名 (代表者等名)	金額 (単位：千円)	特定奨励費で行う事業との相違点
25	三井物産株式会社	三井物産環境基金	東日本大震災が鳥類に与えた深刻な被害をモニタリングする体制の確立（尾崎清明、継続）	7,028	東日本大震災後、鳥類が直面しているリスクの評価及び必要な保護施策を導き出すための体制の確立が目的。資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す特定奨励費事業とは目的・内容が明確に異なる。
	三井物産株式会社	三井物産環境基金	小笠原諸島におけるアホウドリ繁殖地の復元と長期的保全に向けた取り組み（出口智広、継続）	3,264	小笠原諸島にアホウドリの集団繁殖地を復元させるための研究。資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す特定奨励費事業とは目的・内容が明確に異なる。
	サントリーホールディングス株式会社	公益信託サントリー世界愛鳥基金	クロコシジロウミツバメの巣箱を用いた営巣地の保全（佐藤文男、継続）	2,000	絶滅危惧II類(VU)に指定されているクロコシジロウミツバメを保全するための研究。資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す特定奨励費事業とは目的・内容が明確に異なる。
	(独)日本学術振興会	二国間交流事業共同研究・セミナー	大陸周縁地域は種の生産工場か？－極東地域が大陸産鳥類の種分化に与える影響－（齋藤武馬、継続）	2,500	日本列島やロシア極東地域にみられる鳥類の種分化についての国際共同研究。特定奨励費事業で収集された組織サンプル等の活用を伴うが、資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す同事業とは目的・内容が明確に異なる。
	合計4件			14,792	

26	三井物産株式会社	三井物産環境基金	東日本大震災が鳥類に与えた深刻な被害をモニタリングする体制の確立(尾崎清明、継続)	5,233	同上
	三井物産株式会社	三井物産環境基金	小笠原諸島におけるアホウドリ繁殖地の復元と長期的保全に向けた取り組み(出口智広、継続)	4,233	小笠原諸島にアホウドリの集団繁殖地を復元させるための研究。資料群の維持管理、データ整備、情報共有化を目指す特定奨励費事業とは目的・内容が明確に異なる。
	(公財)朝日新聞文化財団	文化財保護助成	福士成豊の鳥類学術標本及び関係資料の保全	1,500	幕末から明治にかけて日本の近代化に貢献した福士成豊が収集した鳥類学術標本と関係資料が、2013年5月福士家の土蔵で発見された。損傷が激しいそれらの資料を修復し保全することが目的である。その成果は特定奨励費の事業に貢献するであろうが、第一義的目的・内容は明らかに同事業と異なる。
	コンサーベーション・アライアンス・ジャパン	アウトドア自然保護基金	御蔵島で繁殖するオオミズナギドリの生態研究と侵入動物からの保護・保全	500	御蔵島をノネコの生息しない島に戻し、オオミズナギドリの繁殖を保護するのが目的であり、特定奨励費の事業目的・内容とは明らかに異なる。
	合計4件			11,466	

9. 次年度以降の事業計画

本欄には、平成26年度以降の事業計画について記述してください（研究項目を設定している場合は、研究項目毎に記述してください。）。

【平成26年度の事業計画】

【I. 資料の収集と維持管理】

(1) 資料の収集と整理

標本は年間に剥製200体、骨格250体を新たに作成する。海外の博物館等の研究機関と組織サンプル、抽出済みDNAの交換を行い、国内で入手の難しい資料の充実を図る。図書資料に関しては、購入・交換・寄贈による新規収集に努める。

保有する資料群（標本・冷凍遺体・組織サンプル・抽出済みDNA・図書資料・標識調査データ）については、品質の劣化を防ぐため、適切な管理条件下での保存に努める。標本収蔵庫や書庫は害虫やカビの発生を防ぐため、年間を通して室内の温度を20℃、湿度を50%以下に保つ。日々の清掃と見回りを欠かさずに行うとともに、管理区域内への害虫の侵入状況に関するモニタリングを実施し、必要な場合には薬剤等による駆除を行う。収蔵庫や書庫には毎年相当数の閲覧希望者が訪れるが、調査対象の資料を速やかに出せるよう、大量の所蔵品の整理に努める。

(2) 共同利用体制の構築とデータ整備

前年度に引き続き、資料の共同利用に関する各種規約類の整備と実際の運用を行う。新たに入手した遺体の採集場所・採集年月日のデータ、形態測定値データを整備し、II班、III班に提供する。DNAバーコーディング事業の推進のため、国際データベースBOLD (Barcode of Life Data Systems) に日本産繁殖鳥類の塩基配列データを登録し、その成果を論文として公表する。

【II. 分布・個体数データ】

(1) 2000年以降の標識調査データ約170万件について、一定精度の緯度・経度情報を与え、データベースとしてまとめていく。

(2) 前年度に引き続き、日本に飛来する鳥類の渡り時期や、集団繁殖地を形成する種の個体群動態に関するパラメータの変遷から、大規模気候変動が地域生態系に及ぼす影響を解析し、その結果を論文等の形で公開する。

(3) 前年度に引き続き、調査日誌に記録されてきた調査手法に関する情報をデータベース化するための下準備として、調査日誌をPDF化し、必要な情報をデジタル化する。加えて、調査手法の違いによって、データに生じる偏りについて解析した結果を論文等の形で公開する。

(4) 標本については、本事業期間中に新たに入手されたものについて、一定精度の緯度・経度情報を与え、データベースとしてまとめていく。

【III. 形態データ】

(1) 標識調査資料を情報源にして約20,000件の形態測定値データのデジタル化を進める。

(2) 三次元形態データ、色彩データについては、各200点を新たに作成する。

(3) 前年度に開発したCTデータベースサイトの試作品を改良し、ユーザーの利便性向上を図る。

(4) 色彩データベースサイトの試作品をデザインし、プログラミングを行う。

【IV. 情報発信】

山階鳥類研究所標本データベース、三次元形態データベースを運営する。順次、未登録標本の情報を付加して配信データ数を増やす。所蔵する単行図書資料のOPAC公開を行う。山階鳥類学雑誌46巻1号・2号を刊行し、44巻の電子版を公開する。

Ⅲ-5. 研究所員の論文・講演等活動成果

1. 原著論文・総説（査読あり）

- Ando H, Young L, Naughton M, Suzuki H, Deguchi T, Isagi Y. (In press). Predominance of unbalanced gene flow from the western to central North Pacific colonies of the Black-footed albatross. *Pacific Science*.
- Arima H, Oka N, Baba Y, Sugawa H & Ohta T. (In press). Gender identification by calls of the Streaked Shearwater examined by CHD genes. *Ornithological Science*.
- Deguchi T, Suryan RM, Ozaki K, Jacobs JF, Sato F, Nakamura N, Balogh GR. 2014. Early Successes of Translocation and Hand-Rearing of Endangered Albatrosses for Species Conservation and Island Restoration. *Oryx* 48: 195-203.
- Guy TJ, Jennings SL, Suryan RM, Melvin EF, Bellman MA, Anderson DJ, Ballance LT, Blackie BA, Croll DA, Deguchi T, Geernaert TO, Henry RW, Hester M, Hyrenbach KD, Jahncke J, Ozaki K, Roletto J, Sato F, Shaffer SA, Sydeman WJ, and Zamon JE. 2013. Spatial overlap of North Pacific albatrosses with the U.S. west coast groundfish fishery. *Fisheries Research* 147: 222-234.
- 加藤貴大・松井 晋・笠原 里恵・森本 元・三上 修・上田 恵介. 2013. 都市部と農村部におけるスズメの営巣環境、繁殖時期および巣の空間配置の比較. *日本鳥学会誌* 62: 24-30.
- 笠原里恵・森本 元・山口泰弘・三上 修・上田 恵介. 2013. 水稲田における水稲の成熟段階および住宅からの距離がスズメ *Passer montanus* の採食場所選択に与える影響. *日本鳥学会誌* 62: 24-30.
- 小林さやか・高橋麻耶・菊池博・岩見恭子. 2013. 神奈川県横浜市で確認されたアカアシミツユビカモメ *Rissa brevirostris* の記録. *日本鳥学会誌* 62(1): 82-89.
- 三上 修・三上 かつら・松井 晋・森本 元・上田 恵介. 2013. 日本におけるスズメ個体数の減少要因の解明：近年建てられた住宅地におけるスズメの巣の密度の低さ. *Bird Research* 9: A13-A22.
- Mizutani Y, Tomita N, Niizuma Y, Yoda K. 2013. Environmental perturbations influence telomere dynamics in long-lived birds in their natural habitat. *Biology letters* 9, doi:10.1098/rsbl.2013.0511.
- 小田谷嘉弥・尾崎清明・仲村昇・齋藤武馬. (印刷中). 新潟県福島県におけるヤブヨシキリ *Acrocephalus dumetorum* の捕獲記録. *日本鳥学会誌*.
- 岡 奈理子・土屋光太郎・河野 博・菊池知彦・丸山 隆. 2013. クロアシアホウドリのヒナは中深層性動物を吐出した. *日本鳥学会誌* 62: 52-56.
- 岡久雄二・大久保香苗・高木憲太郎・森本 元. 2014. 焼間と青木ヶ原溶岩流上の繁殖鳥類相の比較. *富士山研究* 8: 1-6.
- Shirai M, Niizuma Y, Tsuchiya K, Yamamoto M and Oka N. 2013. Sexual size dimorphism in Streaked Shearwaters (*Calonectris leucomelas*). *Ornithological Science* 12: 57-62.
- Takano A, Fujita H, Kadosaka T, Takahashi M, Yamauchi T, Ishiguro F, Takada N, Yano Y, Oikawa Y, Honda T, Gokuden M, Tsunoda T, Tsurumi M, Ando S, Andoh M, Sato K and Kawabata H. 2014. Construction of a DNA database for ticks collected in Japan: application of molecular identification based on the mitochondrial 16S rDNA gene. *Medical Entomology and Zoology* 65:13-21.
- 富田直樹・仲村昇・岩見恭子・尾崎清明. 2013. 2011/2012年に日本全国で観察されたオオジュリンを主としたホオジロ科鳥類の尾羽の異常. *日本鳥学会誌* 62(2): 143-152.
- Yamamoto T, Takahashi A, Sato K, Oka N, Yamamoto M, Trathan PN. 2014. Individual consistency in migratory behaviour of a pelagic seabird. *Behaviour* 151: 683-701.

2. 著書（論文集・分担執筆・翻訳・監修含む）

川上和人（編）．箕輪義隆（絵）．2013. 鳥．ポプラディア大図鑑 WONDA. ポプラ社. 東京.（森本 元 分担執筆）

環境省（編）．（印刷中）．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（第4次レッドリスト）．環境省．（出口智広（アホウドリ・コアホウドリ）、平岡考（オオヨシゴイ・ヨシゴイ）、尾崎清明（ヤンバルクイナ・マミジロクイナ・オオクイナ・シマクイナ・ナベヅル・マナヅル・クロヅル・クロトキ・ズグロカモメ）分担執筆）

永井真人．茂田良光（監修）．2014. 鳥くんの比べて識別 野鳥図鑑670. 文一総合出版, 東京.

窪川かおる（編）．2013. 海鳥から海を学ぶ. 海のプロフェッショナル2：楽しい海の世界への扉. 東海大学出版会, 厚木.（岡 奈理子 分担執筆）．

折居彪二郎研究会．2013. 鳥獣採集家折居彪二郎採集日誌～鳥学・哺乳類学を支えた男～. 一耕社, 苫小牧.（平岡 考 分担執筆）

上田恵介ほか（編）．2013. 行動生物学辞典. 東京化学同人, 東京.（森本元・齋藤武馬 分担執筆）．

マーティン・ウォルターズ．林 良博・山崎剛史（日本語監修）．2013. 鳥の絶滅危惧種図鑑 変わりゆく地球の生態系をビジュアルで知る. 緑書房, 東京.（浅井芝樹・岩見恭子・岡 奈理子・尾崎清明・小林さやか・齋藤武馬・出口智広・富田直樹・仲村 昇・平岡 考・山崎剛史・吉安京子 共訳）．

3. 報告その他（査読なし）

浅井芝樹・齋藤武馬・岩見恭子・山崎剛史. 2014. 山階鳥類研究所の寄贈標本―薄田豊太・豊春氏所蔵標本および佐藤保洋氏所蔵標本―. 山階鳥類学雑誌 45(2)：102-119.

岩見恭子・鶴見みや古・浅井芝樹・齋藤武馬・山崎剛史. 2014. 山階鳥類研究所の寄贈標本―福士成豊所蔵鳥類標本―. 山階鳥類学雑誌 45(2)：120-135.

西海 功・黒田清子・小林さやか・森 さやか・岩見恭子・柿澤亮三・森岡弘之. 2014. 皇居の鳥類相（2009年6月-2013年6月）．国立科博専報(50)：541-557.

岡 奈理子・渡辺ユキ・佐藤文男. 2013. 伊豆諸島鳥島のクロアシアホウドリ *Phoebastria nigripes* 亜成鳥2羽の死因. 山階鳥類学雑誌 44：97-101.

鶴見みや古・園部浩一郎・山道弘美・塚本洋三. 2014. 山階芳麿著「日本の鳥類と其の生態」に関する原稿, 版画等関連資料群の整理保存. 山階鳥類学雑誌 45(2)：136-182.

山内健生・島田 拓・仲村 昇・鶴見みや古. 2013. 家屋内におけるアオバトシラミバエの採集例. 都市有害生物管理 Urban Pest Management 3(2)：61-63.

4. 学会発表等

浅井芝樹・茂田良光・齋藤武馬・岩見恭子. 2013. ミソサザイ日本産亜種の系統関係について. 日本鳥学会2013年度大会（9月13-16日）. 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 116.（ポスター発表）.

出口智広. 2014. アホウドリの再導入・移住計画及び人工育雛. 第24回日本飼育技術学会大会（2月15-16日）. 東京.

平岡 考. 2013. 山階鳥類研究所に採集人折居彪二郎の鳥類標本はどれだけあるか. 日本鳥学会2013年度大会（9月13-16日）. 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 67.（口頭発表）.

巖城 隆・岩見恭子・小林さやか・鶴見みや古. 2013. 日本の野生鳥類の寄生蠕虫相調査の現状について. 第73回日本寄生虫学会東日本支部大会（10月12日）. 国立科学博物館, 東京.

岩見恭子・鶴見みや古. 2013. 新たに発見された福士成豊の鳥類標本―ブラキストン標本との関係―. 日本鳥学会2013年度大会（9月13-16日）. 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 220.（ポスター発表）.

泉 洋江・江田真毅・出口智広・尾崎清明. 2013. 鴛島の再導入コロニーで初卵を産んだアホウドリの母系系統. 日本鳥学会2013年度大会（9月13-16日）. 名城大学, 名古屋.

加藤貴大・橋間清香・笠原里恵・松井 晋・森本 元・三上 修・上田 恵介. 2014. スズメにおける卵の孵化率

- を低下させる要因の解明. 日本生態学会第64回大会(3月16日). 広島国際展示場, 広島市. (ポスター発表)
- 小林さやか・鶴見みや古・山崎剛史・加藤 克. 2013. 山階鳥類研究所に所蔵される鳥類標本とコレクター達. 日本鳥学会2013年大会(2013年9月13~16日). 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 214.
- 黒木知美・長堀正行・鶴見みや古. 2013. トキのウモウダニ相を探る—日本産トキと朝鮮半島産トキとの比較—. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日) 名城大学, 名古屋. 講演要旨集. p. 59. (口頭発表).
- 森本 元. 2013. 情報のアウトプットについて. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日), 標識調査の現状とこれからについて(自由集会). 名城大学, 名古屋. (口頭発表).
- 森本 元・岩見恭子・山崎剛史. 2013. トキ *Nipponia nippon* の羽衣表面の微細構造-化粧色に関する機能の検討-. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16). 名城大学, 名古屋. (口頭発表).
- 森本 元. 2013. ルリビタキにおける構造色による青色およびその他部位の色特性と年齢・性差に関する検討. 日本鳥類標識協会2013年度大会(10月13日). 琵琶湖水鳥・湿地センター/湖北野鳥センター.
- Morimoto G, Yamasaki T, Ueda K, Matsubara H. 2014. Avian data in a biomimetic database and an example exploitation study of the database. Joint international symposium on “Nature-inspired Technology (ISNIT) 2014” and “Engineering Neo-biomimetics V” (12 February). Hokkaido University, Sapporo.
- 岡奈理子・金山 悟・田村良雄. 2013. 御蔵島のノネコ・コントロールとオオミズナギドリへの捕食圧. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日) 名城大学, 名古屋.
- Okahisa Y, Morimoto G, Takagi K. 2013. Lack of experience in local nest predation causes unsuitable nest site selection in the Narcissus Flycatcher, *Ficedula narcissina*. AOU / COS 2013 Joint Meeting in Chicago, IL, hosted by The Field Museum (17 August). Chicago, US.
- 岡久雄二・森本 元・高木憲太郎・上田 恵介. 2013. キビタキの帰還個体はなぜ遅く渡来するのか、縄張りをめぐる雄間闘争における帰還個体と新規加入個体の比較. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日). 名城大学, 名古屋. (ポスター発表)
- 尾崎清明・陸軍・銭法文・江紅星・Hwajung KIM・Jongmin YOON・米田重玄・平岡考・富田直樹. 2013. ズグロカモメの人工衛星追跡による渡り経路の解明. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日). 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 79.
- 齋藤武馬・川上和人・Yaroslav Red' kin・Alexey Kryukov. 2013. カワラヒワ *Chloris sinica* の分子系統解析. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日). 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 66.
- 説田健一・小林さやか・平岡 考. 2013. 旅するアカコッコ〜榎山徳太郎が同好者と交換した八丈島産鳥類標本の行方を探る〜. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日). 名城大学, 名古屋. 講演要旨集. p. 215. (ポスター発表).
- 茂田良光. 2013. 2012年日台共同鳥類標識調査(2012.09.24-09.29). 第28回日本鳥類標識協会全国大会湖北大会(10月12日-13日, 滋賀県長浜市). 講演要旨集: 21-22.
- 茂田良光・小倉豪. 2013. リュウキュウキビタキ *Ficedula narcissina owstoni* の雄・第1回夏羽について. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日). 名城大学, 名古屋. (口頭発表).
- 茂田良光・吉安京子. 2013. 鳥類標識調査の意義. 日本鳥学会2013年度大会(9月13~16日), 標識調査の現状とこれからについて(自由集会). 名城大学, 名古屋. (口頭発表).
- 高木昌興・齋藤武馬. 2014. 鳥類の分布に与えるケラマギャップの地史的および生態学的時間スケールでの意義. 日本生態学会61回全国大会(3月18). 広島国際会議場, 広島市. (口頭発表).
- 高橋雅雄・森本 元・岡久雄二・高木憲太郎・蛭名純一・宮 彰男・東 信行・築川堅治・千葉 晃. 2013. 国内にコジュリンは何羽生息しているのか?. 日本鳥学会2013年度大会(9月16日). 名城大学, 名古屋. (口頭発表).

- 富田直樹・成田憲一・成田章・佐藤文男・森本元. 2013. ウミネコの個体群動態に影響する繁殖期と越冬期の環境要因. 日本鳥学会 2013 年度大会(9 月 13-16 日). 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 158. (ポスター発表).
- 鶴見みや古・園部浩一郎・山道弘美. 2013. 山階芳麿著「日本の鳥類と其の生態」に使用された木口木版および関連する資料群の整理保存と解析. 日本鳥学会 2013 年度大会 (9 月 13-16 日) 名城大学, 名古屋. 講演要旨集 p. 211. (ポスター発表).
- 植田 毅・藤井雅留太・森本 元・宮本 潔・小作 明則. 2014. ランダム・ポーラスフォトリック結晶の構造色解析. 日本物理学会第 69 回年次大会 (3 月 27 日). 東海大学湘南キャンパス, 平塚.
- Yamamoto T, Takahashi A, Oka N, Shirai M, Yamamoto M, Katsumata N. 2014. Inter-colony differences in the incubation pattern of Streaked Shearwaters in relation to the local marine environment. PSG's 41st Annual Meeting (February). Juneau, Alaska.
- 山本誉士・高橋晃周・佐藤克文・岡 奈理子・山本麻希・Trathan PN. 2013. 海鳥の渡りにおける個体行動の再現性. 動物行動学会 (11 月). 広島大学.
- Yamamoto T, Takahashi A, Sato K, Oka N, Yamamoto M & Trathan PN. 2013. バイオロギング研究会 (11 月). 東京大学.
- 山崎剛史・上開地広美・布施静香・小林豊・松原始. 2013. 環境変化が生物多様性に与える正の効果の可能性. 日本動物分類学会大会 (6 月 9 日). 宮城教育大学.
- 山崎剛史・上開地広美・布施静香・小林豊・松原始. 2013. 環境変化が生物多様性に与える正の効果の可能性. 進化学会 (8 月 28 日). 筑波大学.
- 山崎剛史・上開地広美・布施静香・小林豊・松原始. 2013. 環境変化が生物多様性に与える正の効果の可能性. 日本鳥学会 2013 年度大会 (9 月 13-16 日) 名城大学, 名古屋. (口頭発表).
5. シンポジウム・研究会等講演
- 出口智広・Robert Suryan・尾崎清明・佐藤文男・仲村昇・Gregory Balogh. 2014. 小笠原諸島へのアホウドリの再導入. 平成 25 年度「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 -18 世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する-」研究成果発表会 (2 月 13 日, 東京大学農学部フードサイエンス棟 2 F 中島薫一郎記念ホール).
- 出口智広・吉安京子・尾崎清明・佐藤文男・茂田良光・米田重玄・仲村 昇・富田直樹・千田万里子. 2013. 日本に飛来する夏鳥の渡り時期と繁殖時期の長期変化. 日本鳥学会 2013 年度大会公開シンポジウム(9 月 13-16 日). 名城大学, 名古屋.
- 平岡考. 2013. 山階鳥類研究所紹介. 第 6 届台湾鳥類論壇 6th Taiwan Birds Forum (11 月 7 日, 国立台湾大学生命科学館 4 楼).
- 岩見恭子・小林さやか・柴田康行・山崎剛史・尾崎清明. 2013. 野生動植物への放射線影響に関する意見交換会「ツバメの巣の放射性物質汚染状況」(3 月 14 日, 東京都文京区本郷).
- 岩見恭子・森本元・山崎剛史. 2014. トキ *Nipponia nippon* の羽衣表面の微細構造-化粧色に関する機能の検討-. 平成 25 年度「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 -18 世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する-」研究成果発表会 (2 月 13 日, 東京大学農学部フードサイエンス棟 2 F 中島薫一郎記念ホール).
- 森本 元. 2013. 色とは何か〜鳥と光が織りなす不思議〜. 大阪バードフェスティバルシンポジウム〜色・鳥どり 鳥たちの多様な色彩の進化と芸術への浸透〜 (11 月 17 日, 大阪市立博物館).
- 岡 奈理子. 2014. 海鳥の暮らし. シンポジウム 海の魅力を伝えます! 海を学び、海で働く女性から女子中高生へ (1 月 26 日, 東京大学理学部).
- Ozaki K. 2013. “Japan-China-R. Korea Saunders’ Gull Cooperative Research” Seventh Meeting of Partners (MoP7) of the East Asian-Australasian Flyway Partnership (EAAFP) (10-14. June, Anchorage).

- 尾崎清明. 2013. 鳥類の生息と自然環境. シンポジウム「環境にやさしいまちづくり」基調講演 (7月4日, 大仙市).
- 尾崎清明. 2013. 保全研究室、現状と将来方向. 山階鳥研意見交換会 (9月18日, 東京).
- 尾崎清明. 2013. シギ・チドリ類のカラーマーキング調査と湿地保全. 日本鳥類標識協会公開シンポジウム「鳥類標識調査と湿地保全」講演 (10月12日, 長浜市).
- 尾崎清明. 2013. ヤンバルクイナの生態. 環境省主催: ヤンバルクイナ保護増殖事業ワークショップ (12月15日, 国頭村).
- 尾崎清明. 2014. 飛べない鳥、ヤンバルクイナの保全. 東邦大学理学部野生生物保全研究センター設立記念シンポジウム「希少鳥類の未来を考える」 (3月8日, 習志野市).
- 尾崎清明. 2014. 日本におけるツル類の標識調査. 国際ツルワークショップ「ナベヅル・マナヅルの保護と国際協力」 (1月17-18日, 出水市).
- 仲村昇・尾崎清明・米田重玄・広居忠量. 2014. 陸鳥の繁殖モニタリング調査 (2年目の結果). 平成25年度「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 -18世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する-」研究成果発表会 (2月13日, 東京大学農学部フードサイエンス棟2F 中島薫一郎記念ホール).
- 齋藤武馬・川上和人・西海 功・茂田良光・Ya Red' kin・C-H Kim・A P Kryukov. 2014. オガサワラカワラヒワの遺伝的特異性と保全的重要性. 平成25年度「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開-18世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する-」研究成果発表会. (2月13日, 東京大学農学部フードサイエンス棟2F 中島薫一郎記念ホール).
- Saitoh T, Red' kin Ya, Kawakami K, Shigeta Y, Nishiumi I, Kryukov AP. 2013. Phylogeography of Oriental Greenfinch: species-level divergence on oceanic islands. Russian-Japanese Joint Symposium/Workshop on Phylogeography and Speciation in Birds (23 November.), Lomonosov Moscow State University, Moscow.
- 柴田康行・加藤文・岩見恭子・小林さやか・山崎剛史・佐藤文男・出口智広・尾崎清明. 2014. 東日本大震災の鳥類への影響-放射線分析結果-. 平成25年度「山階鳥類研究所データベースシステムの構築と公開 -18世紀末から現在に至る鳥類相の変化をもとにその未来を予測する-」研究成果発表会 (2月13日, 東京大学農学部フードサイエンス棟2F 中島薫一郎記念ホール).
- Shigeta Y, Ogura T. 2013. First Summer Plumage of male Ryukyu Narcissus Flycatcher, *Ficedula narcissina owstoni*. 台湾鳥類論壇 6th Taiwan Birds Forum (16-17 November), 論文摘要集: 21-22.
- 山崎剛史. 2013. 鳥類のロコモーションとボディプラン. エアロ・アクアバイオメカニズム学会第30回定例講演会 (9月4日, 秋田県立大学).

6. 一般講演・研修会等

- 浅井芝樹. 2013. 日本に生息するミソサザイに地理的な違いはあるか? 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (9月21日, 我孫子市鳥の博物館).
- 浅井芝樹. 2013. 日本に生息するミソサザイに地理的な違いはあるか? ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見に来クチャー (11月3日, 山階鳥類研究所).
- 出口智広. 2013. 小笠原諸島におけるアホウドリ繁殖地の復元と長期的保全に向けた取り組み. 三井物産環境基金2013年度上半期助成団体交流会. (9月25日, 仙台).
- 出口智広. 2013. アホウドリの保護の歴史と小笠原諸島の繁殖地復元に向けて. 東海大学サイエンスシェアプログラム「海洋生物を科学する」 (9月29日, 東海大学高輪キャンパス).
- 出口智広. 2013. アホウドリの現状と鴛島の調査結果について. 東京都小笠原支庁委託住民説明会. (10月, 小笠原村).
- 出口智広. 2013. アホウドリの保護の歴史と小笠原諸島の繁殖地復元に向けて. 御蔵島村自然ガイド講習. (11月, 御蔵島村).

- 平岡考. 2013. ヤキトリの鳥類学. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (4月13日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 平岡考. 2013. 山階鳥類研究所の概要. 平成25年度国際協力機構 (JICA) 人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト (モニタリング技術研修) (8月28日, 山階鳥類研究所.)
- 平岡考. 2013. Bird research, conservation, and information disclosure of Yamashina Institute for Ornithology. 平成25年度国際協力機構 (JICA) 集団研修 生物多様性情報システム (9月6日, 山階鳥類研究所.)
- 平岡考. 2013. ヤキトリの鳥類学. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所) .
- 平岡考. 2013. 山階鳥類研究所紹介. ジャパン・バード・フェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月4日, 山階鳥類研究所) .
- 平岡考. 2013. 『日本鳥類目録改訂第7版』について. 日本野鳥の会東京研究部月例会 (12月6日, 日本野鳥の会東京 事務所) .
- 平岡考. 2014. 採集人折居彪二郎と山階鳥類研究所. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (3月8日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 岩見恭子. 2013. 鳥の死体は語る-解剖してわかること-. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所) .
- 岩見恭子. 2014. 鳥の死体は語る-解剖してみても分かること-. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (2月8日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 米田重玄. 2013. 山階鳥類研究所のトキプロジェクトへの関わり. 平成25年度国際協力機構 (JICA) 人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト (モニタリング技術研修) (8月28日, 山階鳥類研究所) .
- 米田重玄. 2013. 最近の中国のトキ事情. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所) .
- 森本 元. 2014. 瑠璃色でないレリビタキは幸せを運ぶのか. Liferbird 鳥のサイエンスカフェ (1月18日. 喫茶Lamp, 東京) .
- 仲村昇. 2013. 標識調査による陸鳥の繁殖モニタリング調査 (MAPS). 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (11月9日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 岡奈理子. 2013. 鳥の行動から放射能被爆を予測する～海鳥オオミズナギドリを例に考える～. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (6月8日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 岡 奈理子. 2013. たかが海鳥 されど海鳥-海鳥研究の最前線-. 翠嵐時報OB会 (10月27日, 横浜翠嵐高校).
- 岡奈理子. 2013. 海鳥とノネコの仁義なき戦い. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所) .
- 岡 奈理子. 2013. 海鳥の不思議な暮らし. 「海のプロフェッショナル2-楽しい海の世界への扉-」出版記念セミナー (12月15日, 東京都葛西臨海水族園) .
- 岡奈理子. 2014. 海鳥とノネコの仁義なき戦い-伊豆諸島御蔵島の今-. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (1月11日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 尾崎清明. 2013. 希少鳥類の保全-ヤンバルクイナやアホウドリ-. 野鳥お勉強会講演 (8月17日, 札幌市).
- 尾崎清明. 2013. ズグロカモメはどんな鳥? 我孫子市鳥の博物館テーマトーク 「(7月13日, 我孫子市鳥の博物館) .
- 尾崎清明. 2013. 鳥類標識調査と鳥類保全. 平成25年度国際協力機構 (JICA) 人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト (モニタリング技術研修) (8月28日, 山階鳥類研究所).
- 尾崎清明. 2013. ヤンバルクイナとグアムクイナの最新情報. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所) .
- Ozaki K. 2013. Okinawa Rail, situation and conservation. Meeting with DENR Guam. (27. Sep, Guam).
- 尾崎清明. 2013. 鳥類と共存するために. 千葉県私学研修会講演 (11月13日, 千葉市).
- 尾崎清明. 2013. 日本とロシアの標識調査交流. 日米・日露渡り鳥保護協定会議 (12月4-6日, 東京) .

- 尾崎清明. 2013. アホウドリの日米共同研究. 日米・日露渡り鳥保護協定会議 (12月4-6日, 東京).
- 尾崎清明. 2014. 鳥類の保全と鳥類標識調査. 千葉県野鳥の会創立40周年記念総会記念講演 (1月25日, 習志野市).
- 尾崎清明・吉安京子. 2013. 鳥類標識調査講義講習会 (4月17-18日, 山階鳥類研究所).
- 齋藤武馬. 2013. メボソムシクイの分類の再検討-日本鳥類目録の改訂と関連して-. ふじしろ野鳥と楽しむ会 総会. (4月14日, 県南総合防災センター, 茨城県取手市).
- 齋藤武馬. 2013. 3種に分かれたメボソムシクイにおける分類再検討の経緯と各種の識別方法について. 北海道バンダー連絡会講演 (6月8日, 森林総合研究所北海道支所大会議室, 札幌市).
- 齋藤武馬. 2013. DNAと標本データベース. 平成25年度国際協力機構(JICA) 集団研修「生物多様性情報システム」コース (9月6日, 山階鳥類研究所講堂).
- 齋藤武馬. 2013. DNAからわかるカワラヒワの地理的変異. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (10月12日, 我孫子市鳥の博物館).
- 齋藤武馬. 2013. 身近な鳥カワラヒワの地域変異を調べてみよう. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所).
- 齋藤武馬. 2014. 3種に分かれたメボソムシクイにおける分類再検討の経緯と各種の識別方法について. 野鳥の会大阪支部・野鳥の会ひょうご・バードレスキュー協会共催第3回鳥学講座. (1月25日, 大阪南港野鳥園, 大阪市).
- 齋藤武馬. 2014. 3種に分かれたメボソムシクイの分類学的研究. 大阪鳥類研究グループ総会招待講演 (3月9日, 大阪市立自然史博物館, 大阪市).
- 茂田良光. 2013. 南西諸島の南北で異なるリュウキュウキビタキの特徴. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (12月14日, 我孫子市鳥の博物館).
- 茂田良光. 2014. 利根川河口周辺に渡来するシギ・チドリ類とコアジサシについて. 波崎愛鳥会30周年記念講演会 (2月22日, 茨城県神栖市中央公民館).
- 富田直樹. 2013. 鳥類標識調査 ～近年の成果と動物装着型小型記録計(データロガー)の可能性～. 新潟県愛鳥センター スライド発表会及び講演会. (11月23日, 新潟県愛鳥センター).
- 鶴見みや古. 2013. 画像でみる山階鳥類研究所の昔とゆかりの人たち. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (5月11日, 我孫子市鳥の博物館).
- 鶴見みや古. 2013. 鳥の体を利用して生きる虫たち—外部寄生虫の世界—. 野学校第6回 (7月5日大崎第一地域センター).
- 鶴見みや古. 2013. (山階鳥類研究所所内見学). 平成25年度国際協力機構(JICA) 人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト(モニタリング技術研修) (8月28日, 山階鳥類研究所).
- 鶴見みや古. 2013. 山階鳥類研究所の所蔵資料(標本と図書)の概要. 平成25年度国際協力機構(JICA) 集団研修「生物多様性情報システム」. (9月6日, 山階鳥類研究所).
- 鶴見みや古. 2013. 山階鳥類研究所紹介. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所).
- 山崎剛史. 2013. 鳥類の分類はなぜ変わるのか、どのように変わったか. 我孫子市鳥の博物館テーマトーク (8月10日, 我孫子市鳥の博物館).
- 山崎剛史. 2013. 山階鳥類研究所紹介. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月2日, 山階鳥類研究所).
- 吉安京子. 2013. 山階鳥類研究所紹介. ジャパンバードフェスティバル, 山階鳥研見にレクチャー (11月3日, 山階鳥類研究所).

7. 一般雑誌・新聞等への執筆

- 出口智広. 2013. 1960年代と2000年代のツバメの渡りと繁殖時期の比較. 山階鳥研 NEWS 248:2-3.
- 平岡考. 2013. 7月21日に我孫子ゴルフ倶楽部内で撮影された猛禽類について. ABIKO (680): 12-13.
- 平岡考. 2014. 神宮の鳥類相. 野鳥 79(1): 10-14.
- 平岡考. 2014. 日本鳥類目録改訂第7版と東京でのコウライアイサの記録. ユリカモメ (701): 16.
- 森本 元. 2014. 鳥類における色彩と機能. PEN News Letter, vol. 4 no. 11. 産業技術総合研究所 ナノシステム研究部門ナノテクノロジー戦略室ナノPEN 編集室, つくば.
- 岡奈理子. (印刷中). 図書紹介 (「海のプロフェッショナル2-楽しい海の世界への扉」窪川かおる編, 2013, 東海大学出版会). 海鳥研究会ニュースレター.
- 尾崎清明. 2013. オオジュリンの尾羽の異常. Birder 28(01):25.
- 齋藤武馬. 2013. 鳴き声と分類. 野鳥6月号, pp. 33-37. 日本野鳥の会, 東京.
- 齋藤武馬. 2013. 3つの独立種に分かれたメボソムシクイ-特に北海道と関係するオオムシクイについて-. 日本野鳥の会札幌支部報「カッコウ」11月号, pp. 7-10. 日本野鳥の会札幌支部, 札幌.
- 茂田良光. 2013 - 2014. Book Review. Birder 27 (4-12), 28 (1-3). 文一総合出版, 東京.
- 鶴見みや古. 2013. 書評. 新保國弘著「コウノトリの舞うまでに」. 利根川文化研究 37: 80-83.
- 鶴見みや古. 2014. 「THE IBIS」誌-日本の鳥とも深いかわりのあるイギリスの伝統ある学術雑誌-. 山階鳥研 NEWS 252:2-3.
- 山崎剛史. 2013. 鳥の分類はなぜ変わるのか. BIRDER 27(2): 36-37.
- 山崎剛史. 2013. 『日本鳥類目録改訂第7版』の分類体系について. Bird Research News 10(1): 2-3.
- 山崎剛史. 2013. 幻の鳥・ミヤコショウビン. BIRDER 27(6): 30-31.
- 山崎剛史. 2013. 日本鳥類目録改訂第7版の分類体系. カッコウ
- 山崎剛史. 2013. 鳥の渡りの不思議. PEN News Letter 4(9): 8-12.
- 山崎剛史. 2014. 大きく変わった鳥の分類-日本鳥類目録改訂第7版-. 山階鳥研 NEWS 251:4-5.

8. 特許・知的所有権等

9. 査読

浅井芝樹

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回)

出口智広

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

岩見恭子

日本野鳥の会『Strix』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(1回)

森本 元

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回), 『Zoological science』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回), 日本鳥類標識協会『日本鳥類標識協会誌』(1回), Strix (1回)

岡奈理子

The Waterbird Society 『Waterbirds』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

尾崎清明

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回)

齋藤武馬

日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回), 日本鳥学会『Ornithological Science』(1回), 山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回), 日本鳥類標識協会『日本鳥類標識協会誌』(1回), Strix (1回)

富田直樹

日本鳥学会『Ornithological Science』(1回)

山崎剛史

山階鳥類研究所『山階鳥類学雑誌』(1回), 日本鳥学会『日本鳥学会誌』(2回), 『The Journal of Veterinary Medical Science』(1回)

10. 社会的活動(行政、学会等団体の委員等)

浅井芝樹

①我孫子市緑の基本計画見直し委員

②日本鳥学会 基金運営委員

③山階鳥類研究所「山階鳥類学雑誌」編集委員(庶務幹事 兼 報告編集担当)

出口智広

①平成25年度環境省 POPs モニタリング検討会委員

②日本鳥学会 鳥類保護委員会委員

③日本鳥学会「和文誌」編集委員会委員

④山階鳥類研究所「山階鳥類学雑誌」編集委員

平岡 考

①日本鳥学会 日本産鳥類記録委員

②日本鳥学会 目録編集委員

③日本鳥学会 鳥類分類委員

④我孫子市 環境審議会委員

⑤我孫子市 谷津ミュージアム事業推進専門家会議委員

⑥松戸市 緑推進委員

⑦ジャパン・バード・フェスティバル実行委員

⑧手賀沼学会 運営委員

⑨日本鳥類保護連盟 全国野生生物保護実績発表大会審査員

⑩日本鳥類保護連盟 愛鳥週間野生生物保護功労者表彰審査員

小林さやか

①日本鳥類標識協会 庶務幹事

②独立行政法人国立科学博物館 皇居の生物相調査第Ⅱ期調査員

米田重玄

①日本鳥類標識協会 評議員、幹事(庶務担当)

②河川水辺の国勢調査スクリーニング委員会(鳥類) 委員

森本 元

①日本鳥類標識協会「日本鳥類標識協会誌」編集委員

②日本鳥類標識協会「日本鳥類標識協会誌」幹事

③日本鳥類標識協会 評議員

④環境省 モニタリングサイト1000森林・里地調査合同解析ワーキンググループ準備会委員

⑤LASP富士山鳥類調査研究グループ代表

⑥PEN 外部編集委員

岡奈理子

- ①公益財団法人 日本生態系協会評議員
- ②東京農業大学農学部客員教授
- ③千葉県 国土利用計画地方審議会委員
- ④千葉県 環境審議会鳥獣部会委員
- ⑤千葉県 環境審議会自然環境部会委員
- ⑥我孫子市 景観審議会委員
- ⑦日本鳥学会 2013 年黒田賞選考委員
- ⑧IOC2014 年大会国内委員
- ⑨山階鳥類学雑誌編集委員

尾崎清明

- ①環境省 中央環境審議会自然環境部会臨時委員
- ②環境省 中央環境審議会野生生物小委員会委員
- ③環境省 中央環境審議会外来生物対策のあり方検討小委員会委員
- ④環境省 中央環境審議会鳥獣保護管理のあり方検討小委員会委員
- ⑤環境省 絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員鳥類分科会
- ⑥環境省 野生生物保護対策検討会やんばる希少野生生物保護増殖分科会委員
- ⑦環境省 野生生物保護対策検討会アホウドリ保護増殖検討会委員
- ⑧環境省 トキ野生復帰専門家会合検討委員
- ⑨環境省 ノグチゲラ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑩環境省 ヤンバルクイナ保護増殖事業ワーキンググループ委員
- ⑪環境省 奄美・琉球世界遺産候補地科学委員会委員
- ⑫環境省 中間貯蔵施設環境保全対策検討会委員
- ⑬環境省 ライチョウ保護増殖事業検討会検討員
- ⑭環境省 東北地方太平洋沿岸地域自然環境調査検討会検討員
- ⑮国土交通省 河川水辺の国勢調査アドバイザー
- ⑯自然環境研究センター 狩猟鳥獣のモニタリングのあり方に係る調査検討業務における検討委員(環境省事業)
- ⑰日本野鳥の会 出水ツル分散化検討会委員(環境省事業)
- ⑱JICA 国内支援委員会委員
- ⑲千葉県 生態系ワーキンググループ委員
- ⑳周南市 ツル保護協議会専門委員
- ㉑日本鳥学会 評議員
- ㉒日本鳥学会 鳥類保護委員
- ㉓山階鳥類研究所理事
- ㉔国際湿地連合 日本委員会理事
- ㉕日本鳥類標識協会 評議員
- ㉖日本鳥類標識協会 海外担当幹事
- ㉗東邦大学大学院理学研究科 客員教授
- ㉘新潟大学研究推進機構超域学術院 朱鷺・自然再生学研究センター協働研究員

齋藤武馬

- ①日本鳥学会 鳥類分類委員会委員
- ②日本鳥類標識協会 評議員
- ③日本鳥類標識協会 「日本鳥類標識協会誌」編集幹事・編集委員

茂田良光

- ①山階鳥類研究所 「山階鳥類学雑誌」編集委員
- ②日本鳥類標識協会 評議員・編集委員
- ③環境省 野生生物課 鳥インフルエンザ専門家グループ委員
- ④環境省 野生生物課 国指定谷津鳥獣保護区保全事業検討会委員
- ⑤自然環境研究センター 生物分類技能検定試験委員

千田万里子

- ①日本鳥類標識協会 庶務幹事

富田直樹

- ①日本鳥類標識協会 庶務幹事
- ②日本鳥類標識協会 「日本鳥類標識協会誌」編集委員
- ③日本鳥学会英文誌 「Ornithological Science」編集委員

鶴見みや古

- ①千葉市 環境影響評価審査会委員
- ②我孫子市 都市計画審議会委員

吉安京子

- ①日本鳥類標識協会 会計

Ⅲ-6. 所蔵資料の利用実績・その他

1. 標本

標本閲覧者 のべ57人

標本貸出

- ・萩博物館特別展「トレジャーアニマル探検記-海と山に珍獣・希少動物を求めて-

2013年7月6日～9月8日に標本1点

- ・ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画展「サバンナからのメッセージ-アフリカの自然とその保全-

2014年3月8日～6月15日に標本1点

資料提供

- ・我孫子市鳥の博物館企画展「鳥の骨展-空飛ぶ骨組み-

2013年7月13日～11月30日にX線CT画像を提供

- ・堀内讃位写真集から画像19点を工房ギャレットヘドキュメント映画「鳥の道を超えて」作成のため提供

2013年12月25日

2. 図書

図書閲覧者 のべ34人

文献複写依頼 12件 45文献

資料提供

- ・下村兼史写真資料. もやいの学校「うらやす野鳥文化史研究会」公開講座「下村兼史と新浜 ～映画『或日の干潟』～」講師 塚本洋三（3月23日 浦安市郷土博物館）.

3. 広報

資料提供

- ・『サムライ人生の達人』3号KKベストセラーズ（三猿舎）（2013年8月発行）（山階芳麿画像、山階賞メダル画像）
- ・『カモメの船長さん 能崎船長の実践ヨット塾』（株）舵社（2013年10月発行）（アホウドリ飛翔画像）
- ・テレビ朝日『CREAM QUIZ ミラクル9』（9月18日放送）（アホウドリ画像）
- ・「Super 理科事典」四訂版 齊藤隆夫（監修）. 受験研究社（2013年12月発行）（アホウドリ飛翔画像）
- ・『大田区版社会テスト4年3学期』（株）日本標準（アホウドリ移送作業画像）
- ・『CAI スクールレポート』11月1日号（「絶滅の危機にあるアホウドリを守れ」）（この内容を全文掲載するウェブサイト「学研ぐるみ」 (<http://gurumi.jp/>) 内の「情報局」コーナーを含む）学研（大悠社）（アホウドリ飛翔画像）
- ・『海の世界』小笠原の海特集. デアゴスティーニ（株）美和企画（巣立ち前のアホウドリ画像；2013年10月）
- ・『サントリーの愛鳥活動・日本の鳥百科』ウェブページ. サントリーホールディングス（上田秀雄氏）（アホウドリの音声；2013年12月）

転載許可

・『三池島のベニアジサシ』展示パネル（熊本日豪交流40周年記念「くまもと日豪交流文化祭」（9月16日～29日））荒尾干潟保全・賢明利活用協議会.（「山階鳥研NEWS」のベニアジサシの渡り調査の関連記事（2002年3月号、2002年10月号、2009年11月号）の転載）

4. データベースアクセス数

蔵書（雑誌）検索（OPAC）へのアクセス数は、のべ729件（246名）であった（平成25年12月31日現在）。
標本データベースへのアクセス数は、のべ18万9500人であった。

5. 鳥類標識調査データ利用状況

鳥類標識調査データ利用申請書の提出を求め、審査し必要なデータの提供を行っている。今年度は20件の申請があり、目的別に見ると、研究目的が18件、教育・啓蒙目的が2件であった。

Ⅲ-7. 新聞・雑誌・メディア記事掲載記録

1. 報道発表

メディアへの報道発表を次の3件行った。また適宜、各種の取材対応を行った。

- ① アホウドリの小笠原再導入 人工飼育個体とつがいになって産卵したメスは 尖閣諸島生まれである可能性が高いことが示唆されました (2013年9月12日)
- ② アホウドリ新繁殖地形成事業による鴛島での人工飼育個体の産卵について (2013年12月3日 環境省同時発表)
- ③ 鴛島のアホウドリの卵について(お知らせ) (2014年1月21日 環境省同時発表)

2. 報道状況

平成25年度の、マスメディアでの報道状況は次のとおり。

●新聞・雑誌・テレビニュース・ネットニュース

※ 同じ記事が同じ社の新聞とネットニュースに掲載されたときは、ネットニュースについては省略した。

<アホウドリ>

- ・雄が雌を追い払う 鴛島のアホウドリ抱卵失敗 経験不足、相性の悪さ原因か (読売新聞夕刊 2013/6/27 p. 10, 佐藤コメント)
- ・ペア復縁 ひな誕生なるか 新繁殖地の形成に期待 (日本経済新聞夕刊 2013/8/27 p. 14 佐藤コメント)
- ・拿信天翁説事 日要登釣魚島 (アホウドリを理由にして、日本は尖閣諸島に上陸したいと言っている) (人民網 2013/9/13; 国際新聞-新浪新聞中心 2013/9/15)
- ・母鳥は尖閣生まれ 卵の調査 鳥学会で発表 (毎日 jp web 2013/9/14)
- ・小笠原で産卵のアホウドリ、母鳥は尖閣生まれ (沖縄タイムス 2013/9/14)
- ・母アホウドリ 尖閣生まれ 卵のDNA 調査 (日本経済新聞 2013/9/15 p. 30 尾崎コメント)
- ・アホウドリ、母鳥は尖閣生まれ 卵の調査 鳥学会で発表 (47NEWS web 2013/9/14)
- ・アホウドリのメスは尖閣諸島出身だった (マイナビニュース 2013/9/18)
- ・小笠原のアホウドリは尖閣の系統 (ニュース (web) 2013/10/13 尾崎コメント)
- ・アホウドリ産卵確認 小笠原・鴛島 (NHK ニュース (web) 2013/12/13 尾崎コメント)
- ・鴛島でアホウドリが産卵 2年連続、初の繁殖期待 (47NEWS ; 福井新聞 web ; 西日本新聞 web その他 2013/12/13)
- ・鴛島でアホウドリが産卵 2年連続、初の繁殖期待 (MSN 産経ニュース 2013/12/13)
- ・鴛島でアホウドリが産卵 2年連続、初の繁殖期待 (日本経済新聞 web 2013/12/15)
- ・アホウドリの復縁ペア、初繁殖なるか 小笠原諸島・鴛島 (MSN 産経ニュース 2014/1/11)
- ・小笠原のアホウドリ また無精卵か (NHK ニュース (web) 2014/1/21 尾崎コメント)
- ・アホウドリ、ひな誕生せず 無精卵で腐敗か、小笠原諸島 (福井新聞(web) 2014/1/21)
- ・小島にクロアシアホウドリ 将来はアホウドリの繁殖地に? (南海タイムス p. 1; 北海道新聞 (web) 2013/4/26 ; 佐藤コメント)

<ヤンバルクイナ>

- ・1981年のきょう 沖縄で新種の鳥発見 (朝日新聞夕刊 2013/11/3 p. 1)
- ・Tales from on the trail of Okinawa's rail. (The Japan Times (web) 2013/12/7 Mark Brazil)

- ・ 戻り始めたヤンバルクイナ 沖縄進む天敵の外来種捕獲（信濃毎日新聞夕刊 2014/2/27 尾崎コメント）
- ・ 絶滅危惧種、沖縄のヤンバルクイナ生息域回復（日本経済新聞 web 2014/3/1 尾崎コメント）
- ・ ヤンバルクイナ戻る 天敵捕獲作戦が順調 世界遺産登録に動く（日本経済新聞 2014/3/2 p. 34 尾崎コメント）
- ・ ヤンバルクイナ踏ん張る 沖縄の危惧種個体数回復（西日本新聞夕刊 2014/3/4 尾崎コメント）

<鳥類標識調査>

- ・ 希少な鳥「オオセッカ」越冬か 県内初 南相馬で確認（福島民友ニュース web2013/7/10 仲村コメント）

<ツバメの巣の放射性物質汚染状況調査>

- ・ ツバメの巣の放射性物質汚染状況（福島民報 2013/ 5/14 岩見コメント）

<福士成豊氏収集標本寄贈>

- ・ 明治の鳥類標本 213 点保全 北海道開拓に貢献、福士成豊収集（朝日新聞 2013/11/13 p. 1 岩見コメント）

<白瀬島採集のペンギン>

- ・ 明治天皇に献上、ペンギン剥製発見 白瀬南極探検隊が捕獲（さきがけ onTheWeb 2014/ 1/20）
- ・ 秋田）白瀬中尉が明治天皇に送ったペンギン、公開（朝日新聞 web 2014/ 1/21）
- ・ 白瀬ペンギン時を越え 千葉の愛好家「追跡発見」東京で公開中 明治天皇に剥製献上→山階鳥研→東大博物館（朝日新聞 2014/ 1/21 p. 25）
- ・ 白瀬ペンギン 100 年の旅 明治天皇に献上→山階鳥研→東大 剥製 東京で公開（朝日新聞夕刊 2014/ 1/25 p. 14）

<大仙市「環境にやさしいまちづくり」シンポジウム>

- ・ 大仙市でシンポジウム開催 山階鳥類研究所の尾崎氏、鳥類の危機訴える（秋田南日々新聞 2013/ 7/ 5）

<折居彪二郎採集日誌の刊行>

- ・ 東洋のオリイ（北海道新聞夕刊 2013/ 9/30）
- ・ 明治～昭和 国内外の鳥獣採集 折居彪二郎の業績 本に（朝日新聞＜北海道＞ 2013/12/23）

<山階鳥類研究所コメント>

- ・ 珍客サカツラガン飛来 砂川の遊水地 長谷川さん撮影（北海道新聞 2013/ 4/12 p. 29 鳥研コメント）
- ・ 脱走フラミンゴ 元気かな？北海道に？中国？キツネの餌食？（読売新聞 2013/ 4/23 尾崎コメント）
- ・ 落ちてるヒナ見つけたら そっと見守るお互い幸せ（ちゅーピー子ども新聞 2014. 5月 p. 1 鳥研コメント）
- ・ 天塩川を珍鳥スイスイ 美深にコウライアイサ飛来（北海道新聞 web 2013/ 5/ 7 鳥研コメント）
- ・ オオハクチョウ飛ばず静内川に「早くけが治って」（北海道新聞 2013/ 7/ 3 p. 27 鳥研コメント）
- ・ 幸運を呼ぶ？「黄金のハト」神戸・兵庫に飛来 湊川公園に”黄金のハト”が飛来。その原因を調査せよ！（神戸新聞NEXT 2013/ 8/31 平岡コメント）
- ・ コサギのオセロ（産経新聞 2013/ 9/28 p. 30 平岡コメント）
- ・ 暗色型の珍客 コサギ（東京新聞 2013/10/3 p. 28 茂田コメント）
- ・ 高松に「シロハラクイナ」 県内 30 年ぶり確認（四国新聞 web 2014/ 1/27 鳥研コメント）
- ・ トキの天敵、カラス駆除に賛否 佐渡の住民や専門家（日本経済新聞 web 2014/ 2/18 尾崎コメント）
- ・ 色彩の自画像 信州第 25 回ブッポウソウ（信濃毎日新聞 2013. 7 森本コメント）

<テレビ・ラジオ番組>

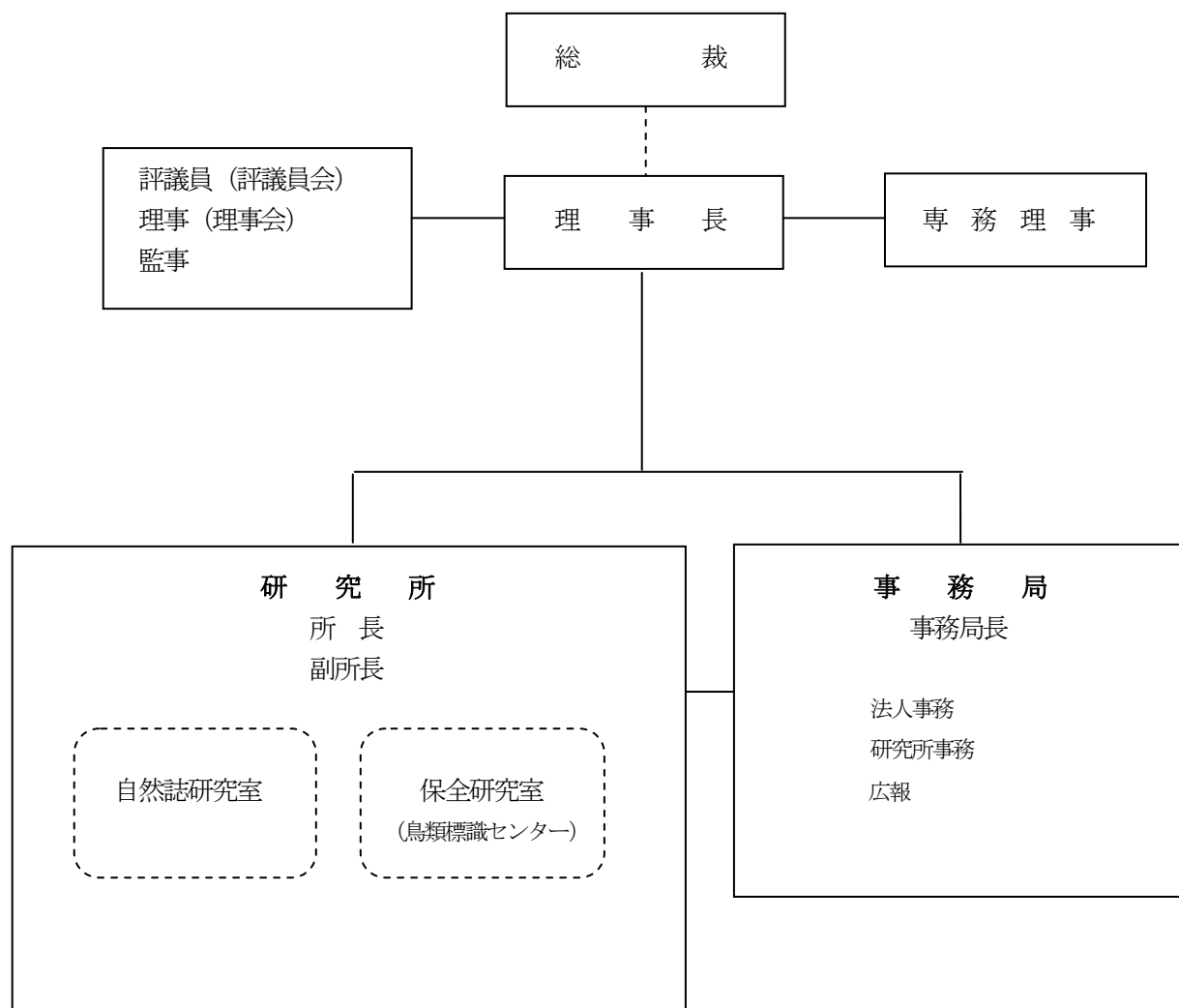
※ ニュース以外

- ・ ダーウィンが来た！「小笠原で初産卵！若きアホウドリ夫婦の挑戦」（2013 年 5 月 26 日 NHK総合）
- ・ スーパー J チャンネル「鎌倉のトビの餌取りについて」（2013 年 11 月 7 日, テレビ朝日, 岩見恭子, <取材対応>）
- ・ NHKアーカイブス「ウルトラアイ ドバトの放鳥実験」（2013 年 11 月 17 日, NHK総合 再放送）
- ・ 人生の正解（2013 年 7 月 7 日, フジテレビ, 岡奈理子, <海鳥撮影協力とコメント出演>）

IV 資料編

IV-1. 組織図

(平成 25 年度末現在)



IV-2. 人員構成

平成26年3月31日現在

総裁	秋篠宮文仁親王（理学博士）
理事長	島津久永（常勤）
専務理事	加藤陸美（非常勤）
研究所 所長	林 良博（非常勤、農学博士）
研究所 副所長	尾崎清明（保全研究室長兼務・理学博士）
事務局長	北條政利

自然誌研究室（所属員 常勤8名）

鶴見みや古（室長）	専門員
岡 奈理子	上席研究員（水産学博士）
浅井芝樹	研究員（理学博士）
山崎剛史	研究員（理学博士）
齊藤武馬	研究員（理学博士）
小林さやか	専門員
岩見恭子	研究員
森本 元	支援研究員（理学博士）

保全研究室（所属員 常勤10名）

尾崎清明（室長）	上席研究員（副所長兼務・理学博士）
佐藤文男	研究員
茂田良光	研究員
米田重玄	研究員
吉安京子	専門員
仲村 昇	研究員
出口智広	研究員（農学博士）
富田直樹	研究員（理学博士）
谷部百合子	経理担当
千田万里子	専門員

事務局（所属員 常勤4名）

北條政利	局長
水谷 仁	経理主任
菅原真理	庶務担当
平岡 考	広報主任（専門員・自然誌研究室兼務）

IV-3. 評議員名簿

公益財団法人山階鳥類研究所

平成26年3月31日

役職名	氏 名	現 職 名	常勤・非常勤
評議員	徳 川 斉 正	(公財)徳川ミュージアム理事長	非常勤
〃	鳥 井 信 吾	サントリーホールディングス(株) 代表取締役副社長	〃
〃	福 澤 武	三菱地所(株)相談役	〃
〃	不 破 亨	湧永製薬(株) 取締役副会長(薬学博士)	〃
〃	鈴 木 榮 一	本財団評議員	〃
〃	安 田 征 史	(株)セルモ代表取締役会長	〃
〃	柳 澤 紀 夫	(公財)日本鳥類保護連盟理事	〃
〃	赤 木 攻	大阪外国語大学名誉教授	〃
〃	小 宮 輝 之	(公財)日本博物館協会 理事 副会長	〃
〃	廣 居 忠 量	元(独)森林総合研究所 理事長	〃
〃	堀 由 紀 子	新江の島水族館 館長	〃

IV-4. 役員名簿

公益財団法人 山階鳥類研究所

平成26年3月31日

理事定数12名。現在数12名。

役職名	氏名	現職名	常勤・非常勤
代表理事 理事長	島 津 久 永	本財団理事長 (公財)世界自然保護基金(ジャパン)副会長	常勤
理事	加 藤 陸 美	本財団専務理事	非常勤
〃	村 口 勝 哉	(財)アジア福祉教育財団評議員	〃
〃	山 岸 哲	兵庫県立コウノトリの郷公園長 本財団研究所名誉所長(理学博士)	〃
〃	林 良 博	本財団研究所長(農学博士) (独)国立科学博物館館長	〃
〃	小 林 隆 成	羽黒山今泉院大聖寺 住職	〃
〃	中 村 浩 志	信州大学名誉教授(理学博士)	〃
〃	伊 藤 哲 司	学習院女子大学名誉教授(農学博士)	〃
〃	尾 崎 清 明	本財団研究所副所長・保全研究室長(理学博士) 社会福祉法人かしわ学園代表理事	〃
〃	進 士 五 十 八	東京農業大学名誉教授(農学博士)	〃
〃	早 川 信 夫	NHK解説主幹	〃
〃	壬 生 基 博	森アーツセンター副理事長	〃
監事	小 宮 宗 太 郎	公認会計士	非常勤
〃	筒 井 眞	公益信託サントリー世界愛鳥基金運営委員	〃

附記：加藤陸美理事(非常勤)：昭和63年7月31日環境省退職。最終官職：環境事務次官。

IV-5. 特任・客員研究員名簿

特任研究員

平成26年3月31日

	氏名	職名	研究テーマ
1	上田 恵介	立教大学理学部生命理学科教授	鳥類の行動生態学・進化生態学に関する研究
2	遠藤 秀紀	東京大学総合研究博物館教授	鳥類の運動機能に関する比較機能形態学的研究
3	岡島 秀治	東京農業大学農学部農学科教授	鳥類と昆虫の関係に関する研究
4	奥野 卓司	関西学院大学社会学部教授	人と鳥との係りに関する社会学的研究
5	小川 博	東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授	鳥類の繁殖生物学に関する研究、佐藤研究員の博士論文指導
6	小城 春雄	北海道大学名誉教授	海鳥類と水産資源の研究
7	加藤 克	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教	標本史および博物学的資料の調査研究
8	佐藤 克文	東京大学大気海洋研究所准教授	水棲動物の生体力学研究
9	高田 勝	(財)沖縄こども未来ゾーン運営財団専務理事・施設長	地域固有文化と鳥類の多面的関係の研究
10	塚本 洋三	(有)バード・フォト・アーカイブス取締役	歴史的な写真資料および鳥学資料の調査研究
11	中村 浩志	信州大学名誉教授	野生鳥類の生態に関する研究
12	西海 功	(独)国立科学博物館 動物研究部研究主幹	鳥類の分子系統地理学・DNAバーコーディング事業に関する共同研究
13	長谷川 政美	復旦大学生命科学学院教授	鳥類の系統に関する研究
14	廣居 忠量	元(独)森林総合研究所理事長	鳥類標識調査による生態研究
15	藤巻 裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	日本・ロシア産鳥類の鳥相、分類、系統地理学に関する研究
16	松井 章	(独)国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長	動物考古学に関する研究
17	真鍋 真	(独)国立科学博物館 地学研究部研究主幹	古生物学に関する研究
18	山本 義弘	兵庫医科大学特別招聘教授	希少種を主としたミトコンドリアDNA全塩基配列の決定・DNAバーコーディング事業に関する共同研究
19	綿貫 豊	北海道大学水産科学研究院准教授	海洋性鳥類の生態研究

客員研究員

		職名	研究テーマ
1	黒田清子		1. カワセミの生態行動調査 2. グールド鳥類図譜調査
2	蘇 雲山	イカリ消毒(株) 主席研究員	人とトキが共生できる自然環境・社会環境に関する研究
3	福田勝洋	名古屋大学名誉教授 公益社団法人日本実験動物協会会長	1. 鳥類羽毛の微細形態データの集積と 利用法の検討 2. 鳥類血管系の解析

IV-6. 意見交換会 発言録

特任研究員との意見交換会

日 時：平成 25 年（2013）9 月 18 日（水）14：00～17：00

場 所：東京大学総合研究博物館 7 階 ミューズホール

非公開

非公開

非公開

非公開

IV-7. 研究成果発表会 発言録

研究成果発表会 26. 2. 13

於：東京大学農学部フードサイエンス棟

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

IV-8. 研究調整会議 発言録

研究調整会議 26. 2. 14

於：東京大学農学部フードサイエンス棟

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

非公開

V 財産目録等

V-1. 平成 25 年度決算資料

貸 借 対 照 表

平成26年3月31日現在

科目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産	116,806,968	140,272,958	△23,465,990
2. 固定資産	1,407,796,335	1,408,660,453	△864,118
うち(1)基本財産	963,575,848	964,468,380	△892,532
(2)特定資産	50,061,675	43,600,000	6,461,675
(3)その他固定資産	394,158,812	400,592,073	△6,433,261
資産合計	1,524,603,303	1,548,933,411	△24,330,108
II 負債の部			
1. 流動負債	12,953,754	13,171,527	△217,773
2. 固定負債	31,347,888	32,524,146	△1,176,258
負債合計	44,301,642	45,695,673	△1,394,031
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	3,461,675	0	3,461,675
2. 一般正味財産	1,476,839,986	1,503,237,738	△26,397,752
正味財産合計	1,480,301,661	1,503,237,738	△22,936,077
負債及び正味財産合計	1,524,603,303	1,548,933,411	△24,330,108

正味財産増減計算書

自 平成25年4月1日 至 平成26年3月31日現在

科目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1 経常増減の部			
(1)経常収益	266,367,185	298,640,112	△32,272,927
(2)経常費用	290,602,254	307,427,061	△16,824,807
2 経常外増減の部			
(1)経常外収益	2,000,548	0	2,000,548
(2)経常外費用	4,143,231	1,701,544	2,441,687
税引前当期一般正味財産増減額	△26,377,752	△10,488,493	△15,889,259
法人税・住民税・事業税	20,000	642,000	△622,000
当期一般正味財産増減額	△26,397,752	△11,130,493	△15,267,259
一般正味財産期首残高	1,503,237,738	1,514,368,231	△11,130,493
一般正味財産期末残高	1,476,839,986	1,503,237,738	△26,397,752
II 指定正味財産増減の部			
受取寄附金	3,461,675	0	3,461,675
指定正味財産期末残高	3,461,675	0	3,461,675
III 正味財産期末残高	1,480,301,661	1,503,237,738	△22,936,077

V-2. 財産目録

公益財団法人 山階鳥類研究所

平成26年3月31日現在 (単位:円)

科 目	金 額		
〔資産の部〕			
【流動資産】			
現 金	3,336,724		
普通預金	57,995,832		
郵便振替	1,032,262		
郵便貯金	149,290		
未 収 金	47,484,300		
前 払 金	2,550,167		
有価証券	1,000,000		
前払費用	258,393		
立 替 金	3,000,000		
内部取引(資産)	0		
流動資産合計		116,806,968	
【固定資産】			
(基本財産)			
定期預金	10,030,000		
普通預金	41,376,166		
有価証券	533,109,753		
土 地	134,000,000		
建 物	242,802,972		
構 築 物	2,256,957		
基本財産合計	963,575,848		
(特定資産)			
退職給付引当資産	3,600,000		
大規模修繕積立資産	3,000,000		
その他積立資産	43,461,675		
特定資産合計	50,061,675		
(その他固定資産)			
建 物	46,540,784		
什器備品	147,583,804		
図 書	537,608		
貴重図書	128		
標 本	61,413		
土 地	352,000,000		
建物減価償却累計額	△ 9,114,738		
什器備品減価償却累	△ 143,576,187		
その他無形固定資産	126,000		
その他固定資産合	394,158,812		
固定資産合計		1,407,796,335	
資産合計			1,524,603,303
〔負債の部〕			
【流動負債】			
前 受 金	80,000		
未 払 金	4,391,614		
仮 受 金	20,000		
未 払 費 用	3,226,817		
未 払 消 費 税 等	2,018,400		
未 払 法 人 税 等	20,000		
賞 与 引 当 金	3,191,923		
修 繕 引 当 金	5,000		
内部取引(負債)	0		
流動負債合計		12,953,754	
【固定負債】			
退職給付引当金	29,977,888		
その他固定負債	1,370,000		
固定負債合計		31,347,888	
負債合計			44,301,642
正味財産			1,480,301,661

注1: 什器備品は公益目的事業分¥142,608,773,収益事業分¥4,975,031

注2: 土地は公益目的事業分¥142,404,290,収益事業分¥209,595,710

VI ご寄附・賛助等に関する資料

平成24年度・平成25年度 寄附金及び賛助会員増減数一覧

<寄 附>

種 別	平成24年度		平成25年度		比較増減額	対24年度 増減率 %	比較増減数	備 考
	金額(円)	件数	金額(円)	件数				
寄 附 金	7,989,391	49	9,534,671	49	1,545,280	19.3%	0 法人 3,388,472円 (14件)、個人 6,136,199円 (35件)	
合 計	7,989,391	49	9,534,671	49	1,545,280	19.3%	0	

<賛助会員>

種 別	平成24年度		平成25年度		比較増減額	対24年度 増減率 %	比較増減数	備 考
	金額(円)	員数	金額(円)	員数				
法人 賛 助 会 員	18,670,000	226	22,870,000	272	4,200,000	22.5%	46 平成25年度入会・再入会 54件、平成25年度 未継続・退会 8件	
地 方 自 治 体	2,950,000	16	2,950,000	16	0	0	0	
団 体 賛 助 会 員	617,000	17	587,000	16	△30,000	△4.9%	△1 平成24年度退会 1件 30,000円	
個 人 賛 助 会 員	16,750,000	1,436	15,965,000	1,447	△785,000	△4.5%	11 平成25年度入会 211人、平成25年度 未継続・退会 200人	
合 計	38,987,000	1,695	42,372,000	1,751	3,385,000	8.7%	56	

総 計	46,976,391		51,906,671		5,110,280	△10.8%		
-----	------------	--	------------	--	-----------	--------	--	--

寄附金・賛助会費 合計	46,976,391		51,906,671		4,930,280	10.50%		
	2,364,000							東日本賛助会員の集い会費
	500,000							現物寄附(図書)
			538,325					寄附 アホウドリ保護活動(保全研究室)
			6,400					寄附 山根みどり(保全研究室)
	13,000		36,000					募金
総 計	49,853,391		52,487,396					

* 金額は年度合計額。賛助会員数は期末時点における員数。

平成24年度・平成25年度 県別 賛助会員数一覧

(各年度末 3月31日現在)

	法人		地方自治体		団体		個人	
	平成24年度	平成25年度	平成24年度	平成25年度	平成24年度	平成25年度	平成24年度	平成25年度
北海道	2	2					23	21
青森県							7	4
岩手県							4	4
宮城県							10	9
秋田県							12	12
山形県							1	1
福島県							5	5
茨城県	17	17	3	3			91	92
栃木県							5	6
群馬県							6	6
埼玉県	2	2					45	35
千葉県	8	8	7	7	13	12	119	113
東京都	64	80			1	1	221	250
神奈川県	4	7					66	60
新潟県			1	1	1	1	17	15
富山県							2	1
石川県							7	7
福井県							3	4
山梨県							5	1
長野県	3	7	2	2			56	42
岐阜県	1	3					88	114
静岡県	1	1					5	4
愛知県	11	9					144	187
三重県	1						13	20
滋賀県							6	6
京都府	15	13					14	10
大阪府	32	33					41	49
兵庫県	3	4	1	1	1	1	31	31
奈良県	2	2					5	5
和歌山県							3	3
鳥取県					1	1	5	4
島根県	2	2					9	8
岡山県	1	1					6	7
広島県	9	7					167	131
山口県							17	12
徳島県							2	2
香川県							29	20
愛媛県		1					5	5
高知県							1	2
福岡県	2	2	1	1			11	10
佐賀県							0	0
長崎県	2	2					10	8
熊本県	35	50					77	68
大分県	2	9					21	30
宮崎県							3	2
鹿児島県	7	10	1	1			12	16
沖縄県							5	5
アメリカ							1	0
合計	226	272	16	16	17	16	1,436	1,447

平成26年3月31日現在

平成25年度 (公財) 山階鳥類研究所 公共機関賛助金一覧

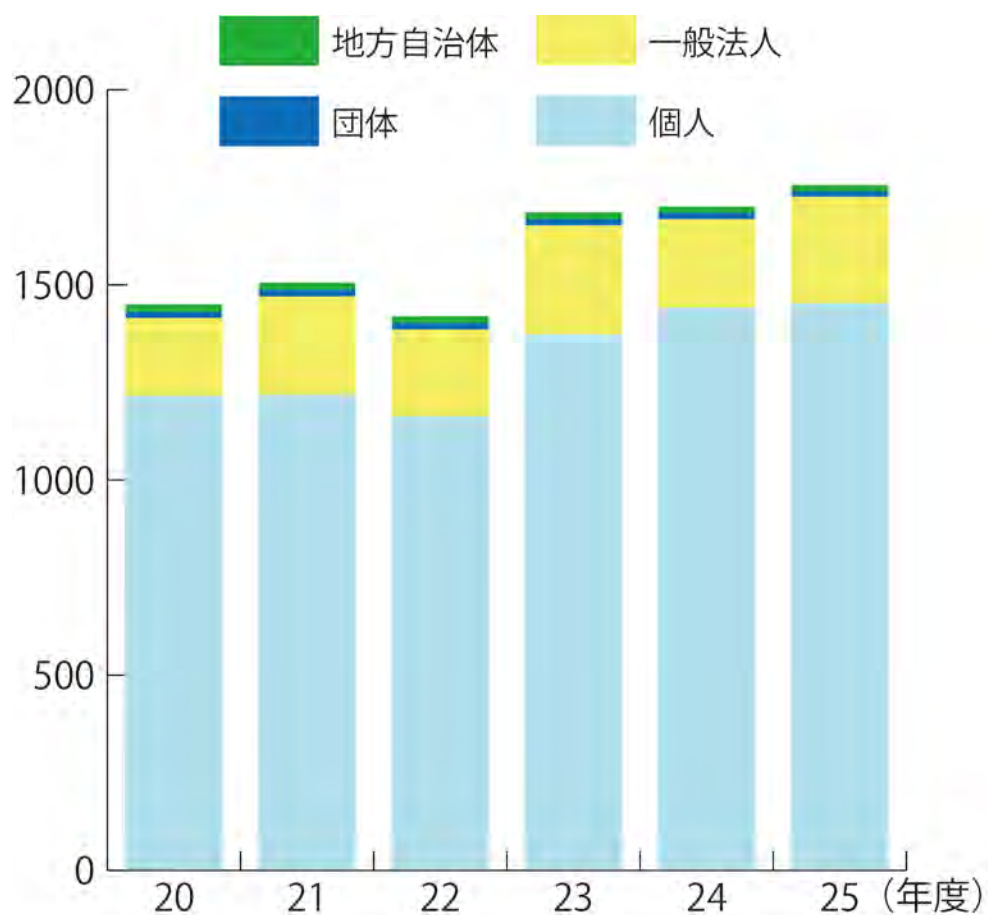
(県市町村名)	(賛助員入会年度)	(賛助金) 円	(担当課)
我孫子市 (千葉県)	S. 60年度	1, 150, 000	鳥の博物館
柏市 (〃)	4 年度	450, 000	文化課
松戸市 (〃)	4 年度	500, 000	みどりと花の課
千葉県 (〃)	2 年度	200, 000	自然保護課
野田市 (〃)	4 年度	100, 000	社会教育課
白井市 (〃)	1 0 年度	50, 000	環境課
成田市 (〃)	1 2 年度	50, 000	環境計画課
牛久市 (茨城県)	5 年度	50, 000	緑化推進課
利根町 (〃)	6 年度	50, 000	企画財政課
稲敷市 (〃)	2 0 年度	50, 000	生活環境課
軽井沢町 (長野県)	1 7 年度	50, 000	観光経済課
中野市 (〃)	1 8 年度	50, 000	中野市立博物館
新潟市 (旧豊栄市) (新潟県)	4 年度	50, 000	文化振興課
豊岡市 (兵庫県)	5 年度	50, 000	コトリ共生推進課
出水市 (鹿児島県)	5 年度	50, 000	出水市立博物館
北九州市 (福岡県)	1 2 年度	50, 000	都市環境管理課

平成24年度・25年度 賛助会員の集い 地区別・実施実績

(平成24年4月1日～平成26年3月31日)

	東日本	中 部	中部・名古屋	関西	中国・四国 拡大	九州
開催場所	東京	長野	岐阜	大阪	広島	熊本
平成24年度	24. 7. 3				25. 1. 23	
平成25年度			25. 11. 8	25. 7. 10		26. 3. 5

賛助会員の推移



平成 26（2014）年 8 月 12 日発行

編集・発行 公益財団法人 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115

TEL: 04-7182-1101

FAX: 04-7182-1106

URL: <http://www.yamashina.or.jp>